

口承文芸能

まえがき

昨年調査した下久保ダムの水没地帯では、石といえば、三波石のことだった。今年度調査の勢多郡東村では、石といえば花崗岩のことである。所が変れば、ことばは同じでも物が違うこともある。しかし日常見慣れている数多くの石が、親しく語り出すことは、多野も勢多も変わりがない。三波川の流れも、渡良瀬川の流れも、ともどもかつては伝説をはぐくんで来たが、流れをばみ、石を割る人の手により、次第に趣を変えようとしている。今度採集された地名伝説・命名の多くは、自然と村人との親しさを物語っている。

一、伝説

(+) 地形・地名関係

草木八景
草木には八個の名石があった。タツノロ、タツ石、トウロウ石、四十
八か石、メガマ石、オガマ石、弘法の割り石、オボシ石。タツ石は高常
寺にあり部落名になつてある大きな岩で、タツノロは竜が口を開いたよ

また伝説と昔話とを結びつけているような落人・異人の話も興味深い。昔話の中には、長い名・屁ひり線など笑い話に近いものと、猿・狐の話が採集された。狼は絶えたが、狐は今も目にふれることが多い、昔話は今も生きている。

労働唄は、柔つみ歌だけであるが、往時の養蚕の様子をしのぶことができる。

戦時中は、農学校の校庭に炭がまとを築いて、炭を焼いたこともあったが、今は全くの昔話になってしまった。「炭の方言」中のことばもやがて消え失してしまうであろう。今回の調査ではないが、その一部を載せて頂くこととする。(上野勇)

うな形をして渡良瀬川の向う寄りにある。タツノロはタツ石に追われてそこまで逃げたのだという。トウロウ石は昔乙姫様が灯明をつけた石だといふが今はない。四十八か石は長さ二十間ぐらいもある大きなみかけ石で、川底に埋まってしまったが、穴が四十八個あいていた。メガマ・オガマはカマド岩ともいう。弘法の割り石は弘法大師が二つに割ったものだという。これらのうち残っているのは、タツ石・オボシ石・弘法の割り石の三つだけである。(下草木)弘法様が足をふんがけた石とい

うのがあって、足あとがついていた。（宮沢）

ホシ岩は石の天井が平らなくぼみで、水がたまつて星が映った。弘法様の足あと、足あとぐらいの黒いいたまりの穴があいた石。弘法の割り石は昔弘法様が血刀で割つたといわれ、うまく割れていて、鉄分がついて真赤になつていて。カマド石は穴があいていたたまつた水を替えると雨が降る。穴は十二コのはしご一ぱいの深さがある。水を替えきらない

うち夕立がきて雨が降つたと年寄りがいう。オガマ・メガマはメガマの穴も十二コのはしご一ぱいの深さがあり、穴に黒い土じがついていた。

これは昔蛇が子を生んでここをはい伝わつたあとだという。四十八か石は四十八の貝がらをおこしたような穴があいていた。灯籠石は寺の少

し下にあり、寺の灯りをつけた時に道から見ると、灯籠をつけたように見えた。タツの口は竈が口をあいた形で、その下にベロの輪のよろな薄い石もあつた。タツ石は今でも寺の下にある。昔、タツの口が石尊様の所から出でて、タツ石を飲むために夜出てきたら、にわとりが「ト

ヶッコー（取つて食おう）」と鳴いたので、タツの口は飲みに行けないので途中に坐つてしまつたという。そこで今は吊り橋のたものにある。草木八景のうちタツ石以外は個人所有でないた

（栗生野）



草木八景（草木）
(撮影 関口正巳)

カマド岩には昔、蛇（ジャ）が住んでいた。メガマとオガマとあり、十ニコのはしごでも届かないくらい深い穴があいていた。雨が降らない年に東村のテー（衆）が全部出て穴にたまつて水をかえ出した。かえると一緒に雨がどんどん降つた。カマド岩に水がのるほどの大水になると、花輪の宿が水没しになるといわれた。（宮沢）

小中鉱泉の事
小川の左岸古生層の崖壁から湧出す。鎌倉権五郎景政が一時小中（大平の斎藤氏家号を鎌倉といふ。権五郎を祀れる祠あり、維新前は鳥海神社に参拝せざりしといふ）東征中射られし眼を洗つて癒えしといふ。（東村郷土誌）

大間々開拓の事

草木村の土豪高草木対馬なるもの、文禄二癸巳年須永村、石原孫兵衛の勧説によつて同志五名（當時六人衆といはるゝ者の祖にして高草木の外須藤、佐藤、金子、長沢、大塚の五家）と共に黒川山中を出て大間々の地を開拓したと伝へられている。（東村郷土誌）

万太郎淵

小中の大滝の下に昼でも暗い氣味の悪い大木に囲まれた万太郎淵といふのがあつた。今は浅くなつたがむかしは大きな淵で万太郎淵へいくなどといわれていた。

この淵は、万太郎が魚をとりにきたところが、魚はとてもよくつれた。するとクモが水から出ては足に糸をかける、また出でては糸をかける。へんなことをすると思ってクモの糸を木の根っ子にかけたら「万太郎」と大声がしてきた。そのとたんに木の根は見る見るこげてしまい、ピクを入れておいた魚がみなねだしてしまつた。万太郎は急いで逃げ帰つた。それから村の人々は万太郎淵へいくなといつらになつた。

足腰・柏ヶ谷

大平の飯場平にカリガケの淵というのがある。むかし、魚を釣りにい

カリガケの淵

つたら大きな魚がいるがなかなかつかないので、ごせいやいて（いらいらして）石を投げこんだら魚が赤ん坊になつて滝を上つたので魚をとらずに逃げ帰つた。これはカツバだろうという。（足腰・柏ヶ谷）

天狗の森

大平の橋場平に天狗の森というところがある。むかし越後の職人がきて、この森の木を切つて製材しようとしたら不思議なことばかりあり、いくら切つてもすぐ切り口が埋つてしまふのでやめた。今でもその森の木は切るなというので大木が並んでいる。ツガ、ヒメコマツ、モミなどで、モミは目通り九尺もある。（足腰・柏ヶ谷）

空海袈裟丸の渓谷を探る跡り塔の沢の嶺を通りときたまた日暮れ夜に至る。小兒群泣のこえを聞き遙に先方を凝視するとき鬼火現れ、尚もよくよく見れば一つの石河原ありて大勢の小兒群り集りて河原の石を積み重ねるとき鬼火は青、赤鬼となりてあらはれしと、小兒等はますます声をはり上げて泣き悲しむ様を見てその責苦を救ふため三夜の看経をして清度せられしといふ。（東村郷土誌）

大袈裟・小袈裟・後袈裟とあり、昔弘法大師が巡遊ってきて、百谷あるので高野山のような寺を開こうとしたが、翌日數えたら天狗が一谷かくしたので九十九谷しかないのやめた。大袈裟山の頂上に弘法様の袈裟懸け石といつて袈裟のように白いところがある石があったそなが今は見当らない。（足腰・柏ヶ谷）

むかし、弘法大師がここへやってきて、寺を開こうとしたが、谷が九十九で、一つたりなかつたので、大師は、自分の着ていた袈裟をまとめてなげつけてとりやめにしたという。これが山の名の由来である。

（押手）

「坂東太郎」という大石は、割ると血が出るといわれ、今でも残つて

大 石

いる。（宮沢）「重なり岩」は塔の沢の相輪塔と同じく上が平らで、馬頭観音が祭つてある。（寒沢）

坂東太郎のはなし

沢入のおくり、渡良瀬川の中に坂東太郎という大きな岩がある。その岩があるとき伊勢参宮をした。ところがおかねをもつていてなくて、とまり錢がおけなかつた。坂東太郎が宿屋の主人に、「おれは上州の沢入というところのこういう岩だ。坂東太郎という。決してとまり錢をたおすようなことはしない、とりに来てくれば返します。」といつた。

その後、宿屋の主人がとまり錢をとりに来たら、岩の上にとまり錢がちゃんとあげてあつたという。（沢入押手）

坂東太郎夫婦石

沢入字春場見渡良瀬川に在る巨大な花崗岩塊である。名の如く雄石雌石とあり、此の夫婦石は伊勢参宮をしたといふ伝説と上流に次第に移転したといふ。尚徳川時代の初期に某諸侯が日光廟前に奉獻する燈籠の石材として破壊せんとした時、石工が矢を入れると其から出血し、石工は風もないのに跳ねとばされたといふ。口碑が伝へられてゐる名石である。（以下略）（東村郷土誌）

岩戸のはなし

あるとき、岩戸へおす、めす一羽のにわとりをはなした。そうするとめすの方が越後へぬけ、おんどりの方は、下の草木へぬけたといふ。おんどりは、草木のかゼンドウというところへ出て、ないたのでわかつたということだ。

岩戸の中には三つに分れていて、國のようく草木のかゼンドウ、さいのかわら、越後へそれぞれぬけられるといふ。山の中腹にある洞穴である。毎年三月二十五日に押手の人たちがおまつりをしていて、おみ

きと、赤飯をあげるならわしになつてゐる。

(中山武之進さん、神山明さんのはなし)

ぬける
さいのかわらへ
越後へぬける



牛沢……花輪に牛の首が流れていったが、その元の牛のいた処といふ。
高助……高界山宝泉寺はもと高介山といった。その高介からとった名だという。

(実はその邊であろうが)

釜戸……不明だが何か訳のある名。

小ボタオロ……冬の日のあたらぬ寒いところ。オロは日陰のこと。

組打場……馬込山の裏の戦争した処という。(神戸)

神戸の名の起り

神戸の入り口に太郎様(太郎神社)があり、こゝに杉の大木があり(この木は先年切った時木目を見たら八百年はわかつた。実際は九百年位の木かと思われるという)、その杉が戸のようになつて悪い風を入れないで神の戸という名をつけた。風は西風一方である。(神戸)

閑守の由来

閑守という地名の由来は結局よく分らないというもまだ元々は川向うの黒保根村大字水沼の小字名であったのが、いつか此方の地名になつたという。閑守から山越えて荻原に出る途中に閑場という所があり、昔そこに閑所があったかとも思われ、この辺一帯を閑守といったのかも知れないという。(閑守)

ジツコ

むかしから住んでいた家のことで、小中は六十八戸がジツコ、新宅はジツコの扱いをしたがよそからきた人はジツコには入れない。共有はジツコだけしかつかえない。共有林の山株は六八株。(足腰・柏ヶ谷)

落居の由来

安倍貞任と源義家の戦つた衣川の戦いのあと、貞任の部等が松島氏の系団の先祖である。その先祖がこの土地へおちのびて住居したというのが、この地名の由来である。(落居)

名越のたたかひたけの由来

ここで、赤城様と、日光の二荒さんが戦争をしたという。赤城様は今までのつて、二荒さんは牛にのつてきましたとかいう。赤城山におまいりした年には中禅寺へ行くなという。(春場見)

(二) 信仰関係

千人塚
下草木にある。これは天正年間由良国繁新田桐生の両所から兵を出し、本城中の松島、阿久沢を攻めた時、戦死者を此所に埋葬したものといふ。

関東古戰錄に「新田桐生の兵百七十余人命を殲し横坂の麓にて松島跡四郎も討れ、大目平沢も深手を負て神梅に立帰り一三日過て死にけり、其後松島、愛久沢が方より氏政へ事の次第相達し南方の首尾を結ひ然して金山の旗こそ成にける」(東村郷土誌)

押出川の右岸丘腹の崖壁に在り、高さ三米、巾四米余、深四米半、西部陥り浸入して深さを知らずと伝へ言ふ。弘法大師一夜此の窟中に宿り雪夢を感じて、今大沢寺に奉祀する。庚申像を押出川中に発見し、尚窟中の観音は大師の奉斎されしものといふ。(東村郷土誌)

審薬師の由来

善雄寺十二世堯慶上人は吾妻郡本宿加島の出で(中略)上人は八十才の寿を迎へられ吾も大聖理世尊の御入滅と同日に達したるは何たる冥加ぞ、せめて此の仏教を報ずるため潔く此の世を去り、日頃信する薬師如來の化身となり、病魔に難む世の人々を救ひやらんと幽明界を異にせしる深き墓穴を掘らせて「月雪も見つくし花も散りぬれば芽でたき國へ我は行く春」といふ一首を残して離別を惜しむ周囲の人々を静かに顧みて「中で鉢の音がしなくなつたら往生をとげたものと思って呉れよ」と唯一言にこやかに会釈して入定された。爾来日夜念佛三昧に入り鉢の音が絶えたのは三七日の夕鶴鳥を競ふ灯とし頃で實に文化十一年三月十二日なりといふ。そこで月々十二日を縁日とし年々三月十二日を大縁日

として上人の大誓願に副ふべく、洽く諸人の福利増進を念願として護摩供養を修することとなつた。(東村郷土誌)

沢入塔の台石
草木東宮橋の上流約百米、左岸杉林中に在る大岩塊で立方形をなし巣頭稍凹み、其の内に一株の樹木が生へてゐる。旧時沢入塔は此の巣上にあつたが世人等の近付くことを憂ひ袈裟丸山の天狗が一夜に上部より次第に塔の沢に移したが、途中鶏の鳴声を聞き此の一石を運びそこなつたと伝へられている名石である。(東村郷土誌)

沢入塔
里俗相輪塔と呼ぶ。塔は旧波良瀬川小田卷の淵の左岸に在りしが土地の開拓につかれた女人等近付き汚すを恐れ、袈裟丸山の天狗一夜にして其の上部より次第に運び積み上げたため上部大きく下部小なりと伝へる。高さ五丈八尺、巾九尺あり。

自然作用によりて生成したるものなりと「上毛風土記」に「沢入十三重の塔あり、三、四間の角石にて建つ凡人の作る所にあらず」といふ。(東村郷土誌)

相輪塔

大昔はそうりん塔は沢入にあつた。それが非常に女の人がおまいりして、そうりん塔の石の上へあがるんで、それをいやがって、お天狗様が一晩のうちに、人の来ないところへ行くんだといって、塔の沢というところから約七軒ばかりの山おくへはこんでしまつた。そのはこぶときには一番上の石を一番先にはこんで下におき、だんだんはこんでいたんだだから、一番下へ小さいのをおいて、だんだん大きい石をしまいにもつていつた。台石が一番上にのつかつてしまつて、今までみると非常に危険な状態であるんだと。けれども、その石がくずれないでいるということは、そこに白蛇をふうじこんであつて、その白蛇がおまもりしているから、いくら地震があつても、なにかあつて、山くずれがあつても、そりん塔は、大昔からくずれないでいるという。

そうりん塔の近くに、むかし勝道上人がきざんだという寝釈迦さまがある。これは、毎年四月八日におまつりをしている。四月八日前にいくと、白蛇が出るといふので、だれも四月八日前におまいりするものはない。

四月八日には、朝くらいうちに、大沢寺の和尚さんが行って、白蛇をそうりん塔の中へふうじこめてしまうので、おまいりの人には、白蛇は姿をみせないといふ。(尚沢入)

そうりん塔は、沢入の西組から入って行き、塔の沢といふところにある。

沢入の庚申様のはなし (その一)

大むかし弘法大師が、袈裟丸山を高野山にひらきたいとおもってここへやってきた。高野山には谷が千谷、宿場が七宿場あった。それがなければ高野山にならなかつた。それで、弘法大師がこれへ出て来たところが、なにもなかつた。そのとき、弘法大師は大夕立に出でくわして、雨やどりがなく、まわりをながめたところが、岩屋があつたので、その岩屋へ入つて、雨しおぎをした。ねむけがさしたので岩屋の中でねた。しばらくねるというと、前の方でかんかんとあかるくみえるのでみたら、雨もやむし、前の川の方であかるく後光がさしてゐた。なんだかわからないのでまたやすんだ。そうするとまた、前の川で後光がさして、かんかんとあかるかつた。弘法大師は、これはなにがあると川へおりてみると、滻のところへ行つてみたら、六、七寸のおすがたがあつた。それを拾いあげてもらつて、それでこの下(押手地内)へお堂をつくつておさめたが、それが、現在は沢入のお寺(大沢寺)へおさまつている。それがなんであつたかといふと、庚申様であった。

現在大沢寺境内にある庚申塔は、以前ここにあつたものを移したも

のである。

庚申様は六本のゆびのある人だといふ。弘法大師が休んだところが岩戸で、毎年三月二十五日にここ(ツボ)だけでおまつりしている。

(沢入押手、中山武之進さん、明治十五年十月十五日生まれによる)

庚申様のはなし (その二)

空海上人が第一の高野山をさがそうと、現在の袈裟丸山へのぼつて、千谷みつけるつもりで谷をさがしてあるいた。しかし、千谷みつけることはできなかつた。そこで、自分のねがいは果すことができなかつたと落胆して、袈裟丸山の頂上で、自分のきいていた袈裟をまるめてなげつけた。そして、その山を袈裟まるめる山とよんだといふ。大師は袈裟丸山を尾根づたいに、現在の相輪塔のおりへ出でてきた。そうしたところが、今のかわら付近にきたとき、下の方から白蛇がのぼってきて、大師をのまんとしておそいかかってきた。大師は経文を唱えて、万物の靈長をのもうといふのは不届きなやつ、といつて応戦したところ、大蛇はくるりと方向をかえて、袈裟丸山の方へのぼつて行つてしまつたといふ。

大師はその後、山を下つて押手の岩戸付近にやつてきた。日がとっぷりくれていた。ここらで、どこか雨露をしのぐところはないかとさがし大師は岩戸の中へもぐりこんで一夜をあかそうとした。ぐつり一ねりして、真夜中に、空海、空海と名をよぶものがあつた。みると、はるか川上に後光のさす仏像があり、それは水中に没してゐた。

「お前の力でもう一度すくいあげてくれ」そういってその姿は消えた。大師は岩戸の中へもぐりこんで一夜をあかそうとした。ぐつり一ねりのなきこえをきいて、この辺に人家があるのでないかとおもい、夜のあけるのをまつことにした。大師は夜があけるのをまつて、にわとりのなき声をたどつて山を下つてきて、部落の人たちをさがしをした。そ

して、今の庚申さま（大沢寺にある庚申さまのこと）をひろいあげた。この庚申さまはしばらくの間、押手にまつてあったが、後、大沢寺へうつした。

大沢寺は、大師が山を下つてくる途中、大蛇と戦つたゆわれもあるので、山号を竜宝山と名付けたという。

（沢入落居 松島喜久治さん 明治四十一年十月生まれ）

沢入の東宮神社の由来

東宮様は、人皇何十代のかの天皇の第一皇子であった。ところが、皇后がなくなつたのであとで後妻がはいった。それであとの方に皇子が生まれて、先の第一皇子は里子に出された。このとき、公卿をつけて里子に出された。そのとき皇子は御年六才で、上州伊香保の里におちのびてきただ。伊香保にきたものの、伊香保は自分の永住の場所ではないと考えて、黒川（渡良瀬川）を上流へとさかのぼつてきた。沢入から半里ほど入った現在の名越へきて、そこへおちつき、そこを名越と定めた。この皇子がここへ住みついて、この辺一帯を統一して、草里と名付けたのが、沢入のおこりである。草里というのは、草をまくらにしてねたといふ意味である。皇子は、名越で三十才のときになくなられたという。皇子をおまつりしているのが東宮神社である。（落居）

五郎神社と鳥海権現

中野には鎌倉権五郎景政（源義家方）を祀る五郎神社がある。また小中には鳥海弥三郎（安倍貞任・宗任方）を祀る鳥海権現がある。その昔、両者が戦つた折、権五郎は眼を弥三郎に射られたが、気丈な人なのでその矢を折つて、弥三郎を追いかけた。弥三郎は、小中のモロコシ煙で落馬して、権五郎に打ち取られた。その後権五郎も中野まで来て死んだ。そのため、小中ではモロコシを作らない。また中野と小中とでは決して縁組をしない。今に至るまでそれは守られている。（関守）

オオゴトの十二様

オーゴト（中畠ともいう）の十二様は、昔、或る天皇の長子の皇子が、生母に死に別れから不遇となり、奥州に縁あつて下る途中、大間々山中を渡良瀬川をさかのぼり、病を得て、にわかに逝去したのでオーゴト（大事件）といい、この地に祀つたものである。この皇子は後に沢入全体で正式に祀り義鎮守とした。この神社が東宮（皇太子の意）神社である。松島は、この皇子と関係が深いとされ、昔は、東宮神社の神輿は、松島以外の者にはつかがせなかつた。

また、松島家は、奥州安倍氏の子孫である高草木氏のわかされとも伝えられる。（沢入）

赤城と日光の争い

一

むかし、赤城さんと日光さんが領分争いをした。そこで、赤城さんと日光さんが同じ時刻に出発して、出つくわしたところを境にきめようということになった。ところが赤城さんは馬（注参照のこと）でとんできた。日光さんは牛にのつてきましたので、名越のたかいけとういうところで出合つて、そこで戦つた。そのためにその辺からは、今でも矢の根石が出てくるという。そこでいろいろお話し問答をした結果、その場所を两国の境としたという。そのために、両国の境をがみあい境という。赤城さんの方が遠くとも、馬にのつてきたので早くきて、土地を余計にとつてしまつた。

今から數十年前までは、一月二日に足尾の妙見さまで、斎藤という家の主人が、赤城へむかつて弓をひいたという。

なお、この戦いのとき、日光さんはにげるときに、さつまのつるに足がからまつて、もろこしのきりかぶで目をついたので、柄木の人は片目はそいといふ。それで、足尾では、最近まで、さつまやとももろこしや米などはつくらなくとも、必ずよっぽら（たらふく）くうことができたという。それは、今でも足尾には大黒様がまつてあるが、そのおつかいの白ねずみが米などをひいてきて、その人たちにくわせるのだといふ

ことである。（検証）

（注）しかし、赤城の神と、日光一荒の神が争ったとき、赤城の神はむかでに立ってきたので、むかでは荒百もあるので早くつき、一荒の神は牛にのってきただのおくれてしまったのだという。（押手）

二

上州の赤城山には、むかしからあんな立派な山がありながら、水がなかったので、水がほしかった。男体山には中禅寺湖という立派な湖がある。ぜひ赤城山にも水がほしいというので、ある晩、赤城の仁王様が、中禅寺湖へ水をぬすみに出かけた。ところが、男体山の仁王様にみつかってしまった、左手をつかまえられた。これでは、大変だというので、右手で中禅寺湖の水をつかんで、赤城山へむかってなげた。それが今の大沼になつた。これでは大変だといふので、男体山の仁王様が、今は赤城の仁王様の右の手をつかまえた。それで、赤城の仁王様は今度は左手で水をつかんで、赤城へむかってなげた。それが今的小沼になつたのだという。（向沢入）

赤堀道元の娘

十六才になるむすめが赤城山へのぼると、小沼へ必ずひきこまれるといふい伝えがある。そのため、十六才のむすめは、赤城山へのぼらないといふ。

むかし、赤堀道元といふ人の十六才のむすめが、どうしても赤城山へのぼりたいといって、親のいうことをきかないで、赤城山へのぼつた。のぼつたところが、やっぱり小沼へひきこまれて姿がなくなつてしまつた。そこで親たちが非常に心配して、むかえに行って是非むすめを出してくれといつてみたら、むすめは蛇体となつてあらわれたといふ。むすめのしめて行つたおびは、今でも湧丸の医光寺に宝物として保存されていて、五月八日（もとは四月八日）には公開している。（向沢入）

三 落人伝説

下草木の高草木

草木には高草木姓が六十戸ほどある。高草木の先祖は高草木高常といい、奥州安倍氏の一族だったが、源義家に敗れて落人となつて逃げのび、渡良瀬川の沿岸を開拓して土着したものという。この時に、上草木の正一位稱荷大明神を持ってきて祭り、高常寺を開基したとか。見沢に高草木氏の城があり、そこから見張りをしたといふ、打出橋の所から打つて出たなどという。紋は下り藤。

（下草木）

（撮影 関口正巳）



高常寺—明治時代に小学校として使

用していた。（下草木）

（撮影 関口正巳）

（寒沢）

黒川山中の此事

康平六年安倍宗任は源頼義に捕へられて都へ連れられ、八幡太郎義家の近侍として召使はれて居たのである。頼義は奥州の乱を鎮めると捕虜の宗任を引立て凱旋の途についた。其の時宗任の一族即党は旧主の名残りを惜しみ且つは頼家の見送りとしてお供をしたが其の衆總て七百三十人といふ多勢であった。

將軍頼義は上野の国へ入ると部将に命じてから大勢の敵方を引連れて

都へ帰るとは朝廷の憲法の制によつて揮りである。百人を越してはならぬ。此の所黒川山中は源家累代の領地である。余りし者は其所に止まるがよい。そして都と奥州の音信の中絶ともなれと命じた。こうして奥州の多くの衆は黒川山中に止まることになった。

黒保根村の神海に近く城の正円寺といふ寺がある。此の寺の所に神海の碧というのである。代々愛久沢で、萩原の五覽田の碧は松島の居城であつたといふ。頼義は愛久沢・松島の党に此の土地をあてがふときに黒川山中は永代安堵の地であるといった証文を手へた。それからといふものは守護不入の地と称され何の旗下にも屬さなかつた。一説に捕虜となつた宗任は此の山中に流放された。後赦免されて義家に仕へたのであるが、其の当所に在つた日故國を恋ふの心が切であり其の地を奥沢・松島などと名付けて、又鳥海権現を祀つたといふ。(東村郷土誌)

安倍宗任の落人がこの地に住みつき、生れ故郷が恋しくなつて松島という地名と苗字をつけた。大本家は、松島部落では高治氏の家で十八代目。高治氏の家は明治二十五年に修理したとき、ホズに慶長十八年と書いたものがあつた由来。(松島)

四 その他

八百比丘尼伝説(断片)

あるところで、お庚申さまが自分で庚申まちをして、ほかの人をよんだ。そこへみんなよばれ行つた。そこで、ごちそうとしてさかなかが出来をして、いた。そのためによばれて行つた人はおどろいて逃げてしまつた。ところがその中で一人の人がよぼよぼしていたのでつかまつてしまつた。その人は、着物をかたしりぱしょりにはしゃっていたので、その中へさかなのきれめをほらりこまれた。うちへきてあつたので大変おど

ろいたという。その人は、そのあと、死んだか死ないのかわからなかつたということである。(大變長生きをしたという)この人のことを八百比丘尼といつた。

武尊神社の老杉

境内には八百比丘尼が植へたと伝へてゐる老杉が三株あつたが、その中一株は大正十二年九月中落雷の災に罹り伐採した。樹令千年以上なりしといふ。(東村郷土誌)

椀貸伝説

八木原の下におわんをかりた家というのがある。ほしいお椀の数をかいたものをそのままにこむと、おわんが注文だけ浮いてきたという。何回もかりているうちに、ある人が一つだけはずつてかえしたら、そのあとかさなくなつたといふ。(春場見)

大川(渡良瀬川)のマスブチ(草木地内)というところの下の淵に、お振舞のときに必要な膳椀の数を書いて川へ入れて、翌朝行くと、それだけの膳椀を貸してくれたといふ。

これは、竈宮から貸してくれたものという。あるとき、一人がかりた椀をぬすんでかえさなかつたので、それ以後いくらたのんでも、かしてくれなくなつたといふ。(押手)

おだまきの糸

沢入地内の渡良瀬川に、おだまきのふちというところがある。そこは淵になつていて、振舞のときに、必要なだけの膳椀の数を書いた紙をなげこんでおくと、翌朝にはその数だけの膳椀が淵にあらわれたといふ。そこから、双輪塔まで、おだまきの糸がつたわっているといふ。石に白いしまが、糸のようについているといふ。淵から塔までは一里以上もある。(押手)

ほととぎす

兄弟がいた。兄貴は懲深の物のわからぬ人で、弟は兄貴思いであつた。二人して山芋掘りに行った。弟は兄にいいところばかりやり、弟はガン首のところばかり食つた。兄貴は弟がどんなうまいのを食つてゐるか気になって弟を殺して腹の中をさいてみたらスジばかりの芋だったので大変後悔して、「ホチヨキツタ」と千べんも鳴いて不帰になつた。

(座間)

ある家で子供ができるて死ぬ。名がわるいのだと寺でつけてもらつた。長い名が寿命が長いのだと坊主がつけてくれた。その名はカンスカンスチャビシヤク、大入道小入道、マツビラ入道スケ入道アノ山コエテコノ山コエテヘエガニニヘエサシテ、ヘエスクモウスク、ヒュウガラモリノドンドロザエモン、という名であったが、この子井戸へころがりこんだ。早く来て上てくれるといったが、なんだといつたら「カソスカンスチャビシヤク……」と長い名を云つて助けをたのんでいる間に死んでしまつた。

彼岸

縁をもらつたら彼岸が来た。その姑が「彼岸が来た」と云つたら嫁が「おつかさんオヘエガンド」と云つた。姑が「そうじやあねえ、ヒガンド」といった。「一人で争つて喧嘩になつた。お寺へ行って聞いてんべえ」という事になり、まあま反物もつていて、「嫁がオヘエガンドといふがヒガンドと教えてやつてくれ」とたのんだ。嫁も別に反物一反もつて行つて「オッカサンがオヒガンドだというが是非オヘエガンドと話して

くれ」とたのんだ。
そしたら坊さま弱つてしまつた。そこへ二人して捕つて行つて、「坊さま坊さまオヒガンドですね」といった。一方は「坊さま坊さまオヘガンドですね」という。坊さまは考へて歌をよんできかせた。

春の彼岸はヒガンドだが、秋の彼岸はオヘエガンド、といった。

昆ひり嫁

嫁がほしくてしようがねえ男がいた。仲人が来て、どうもタセのある女だが貰うかといった。嫁といつたつてどんなタセだと聞くと、一つきに一べんずつ屁をするのだといふ。人間だもの一月に一べんぐらいはいいやさと貰つたが、御祝儀がすんで御床入りになつた。ところがこの嫁は一突きするとブツと屁をひる。これは困るといふので仲人へ話した。その事は先にことわつたまやねえかといふ。だけどとてもがまんがなねえというので暇くれることにした。

嫁が嫁の家へ嫁を送りとどける事になつて送つていつた。秋のことではばたで柿もきをしている。嫁がそれをみて、なんの事だ柿を一つ一つもいでいるのじあらちはあかねえ。おれだら一べんに皆落してしまふと云つた。柿もきの人がおこつてそれなら落してみろ、おとせたら何百円やるといった。そこで嫁が尻をまくつて、ブツと大きな屁をすると、柿がみんな一度に落ちてしまった。嫁がこれを見て考へて、こんない嫁は帰しては損すると連れ戻した。そして特別の部屋を作つて入れておいた。それから内儀さんの事をオヘヤといふ。

(神戸)

牛沢の桑原某氏鉄砲打で、鹿打ちにゆき狼がとつた鹿が落ちていたの

で拾つて来て、売るか食うかしてしまつた。

そのおかみさん（或は母ともい）が死んだとき、埋けたら山犬（狼）が来てほつてつてはしまつた。白足袋をはいた足などが落ちていった。

山犬のとつた鹿はただとつては駄目だ。塩を御礼においてくるものだ

とい。 （神戸）

狐の話

○高助の上の山で、提灯が桑の木の上を来て、だんだん下つてきて土の上をころがつて来た。

○草木へ行く道の一本櫻の處へは、狐だからむじなだか出た。古いむじなで人を化した。煙の中を「おお深え、深え」など云いながら歩いている人があつた。ゼンさんがむじなをとつてから出なくなつた。

○仙治さんは、「お寺へゆく坂を上ると提灯の火が急に消され、しらべたらローソクがとられていた。ローソクをたべられるのだと

いう。

○桶屋のじいさんが、坂本彦三郎氏の竹のタネを手をひろげて見てい

た。どうしたときいたら、本人は芝居をみていたと云つた。

狐のつく話

狐がつくいろいろの事を云う。どこから来たというと、どこそこの観音山から來たなどと云つた。

弥次さんは唐沢山から來たなどと云つた。

アメウマさんに狐がたかつて、棒など持つて歩いた事もあつた。昔は狐のつくという事を本当にしていたから、縁の下で鉄砲をうつたり、座敷に毛があつたものである。 （神戸）

めめずとへびの目と声の交換
むかし、なにか非常にいい声で歌をうたつてゐるんだと。それをめめずがそばへ行つて聞いてみたところが、へびがうたつていて。それで、へびさん、へびさん、そんなに上手なうたをうたうんじや、おれにも教

えてくんねえかと。ところがへびは、おれはうたはうたうんだけれど、自分が見えねえで非常に困つてゐるんだ。おまえの目をくれたらば、そのうたをやろうじゃないかと。じゃ、うたをくれれば目をやろうというわけだ、へびさんはめめずにはうたをくれて、めめずはへびに目をお札としてさしあげたと。そういうわけで、めめずは非常に今でもうたが上手で、夕方になるといい声を出して、土の中で上手にうたをうたうと。

この辺ではとてもいい声でうたうとみみずの長鳴だとい。

犬の足

むかしは犬の足は三本だった。それで、三本じやあるくのに非常に不自由であった。そんなわけで、弘法大師が足を一本犬にくれたんだつて。そんなもんだから、犬はこれは大切な足だからというので、小便するときには必ず、片足をもちあげてするという、こういうわけだ。

（向沢入）

（向沢入）

三、命名

(+) 地名

神戸のあちこち

金山

神戸の奥に金山があった。何人も代って掘った。時代によつては少し位は金はでたのである。金山の初りは徳川時代であった。

高瀬（盛治氏の祖父）氏の話に金のある所は鶴の形をしているのだが、やつとその尾の毛のところへ掘りつけたばかりだという。

天狗岩

神戸分の金山の奥にある。音羽の滝があり、天狗のお宮があつた。嬉しい岩ばかりの所である。

音羽の滝

天狗岩にあって美しい滝である。

太郎様の杉

八百年位たつ杉があつた。大正の頃切つたのは三百五十年位で一丈五六尺あつた。七千円で売つた。

地名

幕坪 弘法大師が袈裟丸山に登るときに日が暮れたのでこの土地を暮坪という。

御所平

御所様が祭つてあり、弘法様がここで休んだ。

帰地（カエローチ）

弘法様が袈裟丸山に登るとき日暮になつたので帰

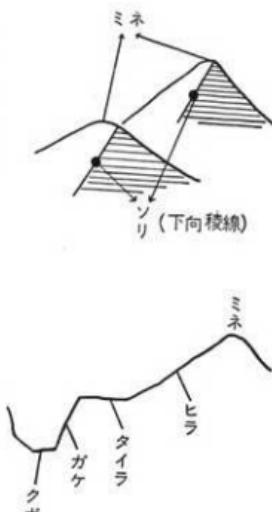
らうといったので。（小中東沢）

釜抜（カマヌケ）

追付橋（オツヅケバシ）

栗生（クリユウ）

地形名



台地をタイラといふ。
上りの右側をオロヒラといふ。
下りの右側をヒヤテといふ。

小中川の淵の地名

ハコブチ・万太郎淵・ジャガブチ・湯淵・虎が淵・茶釜淵・ジャンボンブチ・杉の木淵・巻日淵・ナマグサブチ・オケサブチ・マルブ

小中の岩・クラの地名

入道岩・ザトウガクラ岩・ケサガケ岩・マク岩・シシ岩・オロ岩・ヤシロクラ・シラクラ・アレクラ

クラは大きな岩場のこと、岩はクラより小さなものをさす。

(小中東沢)

(一) 名 前

珍らしい名

市川大死(大普院先住)

松島鷲虎狼(しゅうごろう)

(沢入)

宮原かわる(小中)

女性で男性のような名

大橋 武男(三ヶ郷)

(柳平)

(花輪二区)

(二) あだ名

あだ名

ハイハイノキンペードン 何だってハイハイと聞いていた。

ネジリツクセータボキチドン 挨拶なしに他人の家に入つて來たりして、一風變つている。

ソリヤオマエノチヨーベンサン 話の途中で、人の話をとる。

キリツノトリサン 柄せているが、マメツタイ。

インゴートメドン 人のいうことをきかない。自分でもうかることでなけりや返事をしない。

(横川)

四、言葉

おつかあの座布団

且那さんが小さくなっている場合に、ありやおつかあの座布団だとい
う。（花輪）

亭主が妻の尻にしかれているのは「アカヅキンをかぶつている」とい
い、「奴はザブトンだ」「奴はコシマキアライだ」などという。

（中野）

方言

チャーンボコ……ヒザ頭

チユウジガキ……石垣

ハチベエダマ……月経の錦

カーテロ……マゼロ

アグ……アゴ

ヒデエモネエコト……デタラメ

（神戸）

葬式（じやんばん）

（東村郷土誌）

チツクラモツクラ——さいはう、針しごと

イスクマリになる——動けなくなる。

シツチモツチしてはいられない——ぐずぐずしていられない。

（栗生野）

かまきり（かまぎりっちょ）
搔きちらす（かつちらす）

ござります（がんす）

仕方がない（じつない）（しょうがない）

死人（しほと）

すねる（じぶくる）

兄（せなあ）（せない）

面倒（せつちょう）

えらい（づない）栓（じょうご）

うそ（でんぱう）重い（もたい）

たくさん（うんと）

つまり（ひつちわる）美人（めめっこがいい）

つまむ（ひつちわる）

糞（こはか）（こふん）
不条理（へだいなし）（へてえなし）
体の具合がわるい（あんべがわるい）
起きたて（おきむくり）
冷笑（おひやらかす）
（おつと）
押しくじく（おっぺしょる）

五、諺・謎

(一) 謎

いい子機敏いらす（美貌女のこと）
急ぎの高瀬
腹も身のうち
豆腐にかすがい
屁と火事は元で騒ぐ
借りる時の地蔵面
下さる物は夏も小袖
あて事ともっこ禪は先からはずれる
口に蜜あり腹に針あり
子とふぐり（墨丸）は荷にならぬ
腹も身のうち 腹八合に医者いらす
坊主まるのもうけ
たなからほたもち

「神戸へはムコをくれるな」という。
正月十六日の晩、裸で水を浴びさせられ觀音様の石段上りをさせられるから。（下神戸）

（東村郷土誌）

(二) 謎

昔はナゾトキ坊主というのが来た。三味線をもつて語り物をして、相間に謎をかけさせて仰座にいた。
ある時、「ナゾトキ坊主タソヲクラエ」とかけられた。そしたら「夕立とトクわえな」と答えた。「その心は」と云われたら「ニシガクラエ」といったという。

六、芸能

(一) 芸能

ゲンコツ踊り

昔はこんな踊りが流行した。ただニギリコブシを左右に振って踊るだけのものであった。唄は八木節に似たような節であった。文句もやはり鈴木主水などがあった。

馬方節

これは追分だった。銀さんという上手がいた。

木曳歌

木曳が唄った。「入り来る西行は福の神」などといふ文句があった。

(神戸)

小中の神楽

むかしはしたが、今は霜月十五日に十二様に頭だけ供えてやめる。

小中の獅子舞

六月十五日^一に島海神社で舞う。流行病のときも舞つた。

頭・面

メジシ・ダイジン・トモジン・オカメ・ヒヨヅトコ。

種目

御入道(道行き) 神社のまわりを三回めぐる。

広庭(ヒロニワ)・花幹・女獅子がくし・洞がかり・へいづくし。

(二) 民謡

1. 労働歌

桑とりの時の唄

(桑は高木なので登って枝から葉をこきおとしてとる。その時唄う)
蚕上れば沼田の城下、つれてゆくから辛搾しな(ろ)。

辛搾しようと一人ぢやできぬ、車も片輪ちやまわらない。
辛搾取り様とは名はよいかれど蚕終れば山住まい。

蚕三十日は且那さんのメカケ。蚕終れば泣きわかれ。

有りがたいぞえ又日が暮れた。今日の給金まるのこり。

(座間)

酒盛り歌

○オトモリ子モリはつらいもの、雨風吹いても宿もなし。

めでためだてたやこの蚕は、鶴が酌して亀が呑む。

子守唄

○ネンネンねる子はお江戸へやるぞ、お江戸チンチリメン着物。

(星野とりさん明治八年生)

○ネンネン ネコジマノガリガリオトメ オトメ 大キウナレ
オ江戸 ハヤルゾ オエドジヤ チンチリメンノチリメン イナカハナ
タネノ花ザカリ。

(座間)

2、童 嘴

○トンボ トンボ コノユビトマレ

○ホ、ホ、ホタルコイ、

アツチノ水ハニガイゾ

コツチノ水ハアマイゾ

テツコハツコ ハヤクデテコイ

デテコネート 水ヒツカケルゾ

(火事ニナルゾ)

○クモサン クモサン 出テオイデ

○ウマデーロ ウシデーロ (これはあざみの虫に呼びかける。)

○ネンネン ホウズキ タネヨリ ネガサキーデーロ

○オテントサマニ石投ゲテ、

棒ヤツタラカンベンシナイ

花ビラヤツテモカンベンシナイ

葉ツバワヤツテモカンベンシナイ

重箱ヤツタラカンベンシタ。

手 稚 歌

○大もん様と小もん様と手を引

き合つてどちらへさる

どちらと申せば日光へござる

日光へ行くならお供に願ひ

一の丸こへて二の丸こへて

三の丸前にお船があつて お船の中に水汲み女子
やれておがめそれでおがめおがめはわたしが髪ゆうてあーげよ
かみゆうてあげよ からこがよいか 島田がよいか

からこもいやよ 島田もいやよ 当世ばやりの おさげがみ
おさげがみ ますます一かんかし申した (東村郷土誌)

○鳥啼け啼けあの家の屋根で
あの家はんじょうとなけ鳥

3、童 戲

○ぞうりをなげて、アシタテンキにしておくれと唱える。表が出る晴、

裏がでると雨、横は雪。

○甲虫の名

○オムニムシ (角が一本) アカオニ (同上で赤い) カブト (二本角) タ

ワガタ (同上)

(東村郷土誌)

東村の民謡、俚謡の調査

(わらべ唄も含む)

民謡や俚謡については、古老に尋ねても、あまり、ほり出すことはできなかつた。

ようやく採取できたものに、次のものがある。

たんと馬鹿にこけ

長くは ないぞ

せめて かいこの

あがるまで

これは柔摘みのときうたつたものと言われている。

養家庭の娘の心とも言ふ古老もあるが、出かせぎに来た、柔摘みの人たちのぐちであると別の古老は言つている。

現在ではこの歌はきかれない。わらべ唄については、つぎのものがあった。

お手玉うた

○一ばんはじめの一の宮

二また日光 中禅寺

三また佐倉の宗五郎

四またしなのの善光寺

五つ 出雲の大やしろ

六つ 村むらちんじゅ様

七つ 成田の不動様

八つ 八幡の八幡宮

九つ 高野の弘法さま

十で 東京しんがん寺

これほど信頼かけたなら

波子のやまいもなおるだらう

武雄がいくさにまいるとき

白いリズムのハンカチを

うちふりながら「ネエあなた

早くかえってくださいな」

ゴーゴーゴーとなる汽車は

波子と武雄の別れ汽車

一度と会えない汽車の窓

泣いて血をはくほととぎす

ますますいつかんかしました。

むこうのやぶに えさしが通る

えさしのこしもとながめてみれば

えんどうきんちやくさらりとさげて

お手には一合のおさごをもって

あまりさしたか くじやくのとりは
とんで行きたい ながやのうしろ（名古屋のお城か？）

ながやのうしろは名高いうしろ
一だんあがり 二だんあがつて

東を見れば
三だんあがつて 東を見れば

よーいよー子が 三人通る

一によいのは一やのむすめ

二によいのは二にやのむすめ

三によいのはさだやのむすめ

さだやのむすめはだてしゃじやないか

おびをひとは 茶色にそめて

そめた心は ぼたん花 ぼたん花

ますます いつかんかしました。

おさらい ——————

おひとつ おひとつ おとして

おふたつおふたつ おとして

おてしまげ おてしまげ おとして

お手ばさみ お手ばさみ おとして

おちらん おちらん おちらんおとして

おしょうつけ おしょうつけ おつけかわかしておちらん

おひだりがつきり おひだりがつきりおとして

おてっぱ おてっぱすりや名人だ

名人どこそこおしまいだ おとして

玉かつきり 玉かつきり おとして

おかんじょ おかんじょさん

かんじょかんじょかんじょかつきり

おんばさん おんばさん

おんばさんがおかごで ゆらゆら

おんばさんとがつきり あさかわ
あさかわながし あさかわながし

ながしきつたら どっぴんしょ
たてかわ たてかわながし たてかわながし

ながしきつたら どっぴんしょ
おおはし おおはしくぐし
おおはしくぐし

くぐしきつたら どっぴんしょ
おかしあげ おかしあげ おかしあげ
おとして おさらい

くぐしきつたら どっぴんしょ
おかしあげ おかしあげ おかしあげ
なわとびうた

くぐしきつたら どっぴんしょ
おかしあげ おかしあげ おかしあげ
おおはしくぐし

○月火水木金土 日よう日

山風そよすけが
さくらの いづみをこえて

ビーヒヤラビーヒナラ三ざえもん
おわりのかみさま四んざえもん

茶つぼにおわれたまきたばこ
それ はいれよはいれよ にげる。

○青山のでこちやんが
おぎょうをよんで いらっしゃる
デコボコ デコボコ ナンママイダ

一はつさん 二はつさん
三はつさん 四はつさん……

一おぬけ 二おぬけ 三おぬけ……
○たわらのねずみが 一びきチュー
一一ひきチュー

ほらおもどりしょ.....

ほらおもどりしょ.....

○まりつきうた
○あんたがたどこの子

○お寺の前の子
ちつちやいねえちゃんキュービーちゃん
大きいねえちゃんおしゃれ

きしゃごのねえちゃん くーろんば
○とんとんたくはだれじやいな
しんばしこうやのうさちゃんと
うさちゃんとまごろなんにきた

じょんじょがないからかいにきた
じょんじょがいまごろあるものか
はっかけたでもはいていけ

びっこしゃっこびっこしゃっこ一けんや。
○あんだがたどこさ

やなぎの下で
しようばいなあに
あまさけしろさけおしろさけ

○いわりつとらあ らつとりつとせ
せがほけきょうの たかちは

ちょんがらめ
○一でランラン ラツカサンがしつし

ししもちきやつきやつキヤベツでホイ
これらわらべたの中には、外部からこの村に入ってくるとき、あ
るいは入ってきてから、かなり、変えられてうたわれているものがあ
る。

新しいものや、新しいことばがとり入れられたものなどは、まだこ

のほかにもあるが、少しずつ下品なものに変えられてきている。

新しいものといえば、近年盛んに行なわれた新民謡創作運動の中で花輪音頭という新しいうが生まれひろくうたわれている。

ハアー 春の花輪へ来てみやしゃんせ

おぼろ夕月 桜の名所

ソヨロ春風 一枝ゆれて

乙女桜の胸に散るソレ

ホンニソーダヨ 胸に散る

ハアー 夏の花輪へ来てみやしゃんせ

河鹿ないて渡良瀬川よ

中野平の 祭の笛も

涼む二人の 袖になるソレ

ハアー 秋の花輪へ来てみやしゃんせ

向う大畑 名代の柿よ

小夜戸 山からのぞいたつきに

渡る吊橋 恋の橋ソレ

ホンニソーダヨ 恋の橋ソレ

(沢入地区のわらべうた)

なわとび

○「羽のからすがかあかあ

一羽のにわとりコケコッコー

三四魚が泳ぎだす

それ一が出る二が出る三が出る

「や一なぎにころぎったんばつこん 川またぎ」

○つーりだ つーりだ

しのだのもりの どなつきつね
いまつってみせるから
ゆだんをするな一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つ十

○くまさん くまさんまわれみぎ
くまさん くまさんお手をつき
くまさん くまさんだっこして
くまさん くまさんおんぶして
くまさん くまさんないちやつた

くまさん くまさんさようなら
くまさん くまさんさようなら
くまさん くまさんさようなら
くまさん くまさんさようなら
くまさん くまさんさようなら

○おじょうさんおはいんなさい
ありがとよ おつかやつちや
まけたらさつさとおにげなさい
まりつき
「いっちょうめのいーすけさん

いの字がきらいで

一万一千一百石一斗一斗一斗(一升一合)豆お食に納めて一ちょうめ
にわたそ。以下数字がふえて十ちょうめまで)

(花輪小学校教諭 神山庸司記)

ままとごと

とんとんはたくはだれんだい
しん町米屋のじろさんだい

おまえはいまごろなんに来た

わらびがきれ一てかいにきた

じろうさんならくれてやる

たろうさんならかしてやる

「よってお茶でもあがらんか」

「はーいありがとうございます」

(花輪地区まりつき)

○いちりき かこちゃん

バーマネットかけて
みつともないからはぎりましよう

(ホールをとる)

「草もちベッタンコまるめてほい
いちられづらんばんはれつして

日露戦争はじまつて
さつさととげるはロシア人

死んでも進むは日本人
五万の兵をひきつれて

六人の親にいれられて
七月八日の戦いに

ハルビンまで攻めいって
くじらの戦争大戦争

東郷大将万万才
ばんばん一回 ばんばん二回

十三ざさん花鳥の声
ばんばん三回 ばんばん四回

ばんばん五回
十一いっさい物語

十二は日光 東照宮
十三ざさん花鳥の声
ばんばん三回 ばんばん四回

十四は新年おめでとう
十五はこうごう汽車の音
十六六年卒業して
十七……

七、炭の方言

はしがき

「詩をつくるより田を作れ」といふ言葉がある。だがさう言はれなければ詩を作る方が田を作るよりも大切のように思つてゐた者が幾人もあつた事が想像され微笑を禁じ得ない。

炭焼に於ても亦然り。「詩を作るより炭を焼け」である。然し田を作りつつ、炭を焼きつつ、なほ詩を思ふゆとりがあつたなら、汗みどろの生活にもどんなに潤ひの出来る事だらうか。此の小稿は上州方言資料の一とするとともに、所謂炭焼学徒隊として活躍した生徒達に感謝の意をこめ、炭焼も歌になり句になる事を示したものである。

私は炭焼を見るのは今年始めての未熟者である。努力はしたが、遂にこれだけのものしか出来なかつた。幸に経験を積まれた先学各位の御示教を得て、他日此の草稿を清書する事が出来れば望外の喜びである。

昭和十五年四月

群馬県大間々農業高校に於て

上野勇

炭に関する方言

アカメ 白炭。ジユーニサマのタクワングリッテ切る事を忌む。東村

アクダーラ 此の木はジユーニサマの遊ぶ木といつて切らない。川内村

アゲキ 三又の木、尾根にある三又の木は——と称し切る事を忌む。

アサキ 雜木、櫟、桜等、クロキに対する語。アツタメガマ 始めて使用する電をあたためる補助電。

アラシグチ 通風口。

オカラガマ 平地に築いた炭窯。

オミキスズ 竹筒。お十二様を祭る時、竹のシンコを二本切り、それに杉の葉を挿し神酒を注ぐ。二つをヒトフレにし、紐で結び木の枝に吊す。此の時シンコクシにし

て一本引くと直ぐとけるようにし、コメムスピでは悪い。

イゴヤ 炭小屋。「山が終えれば次の山へ行く、一寸居る小屋だからイゴヤさ。」

イシバサミ クチヌリシを抜む棒。

イチマイ イツバイ 炭窯を数える時のう。

イドリ・エドリ 石窯の通風口の上方の石。フタエ・ハリイシ。

カガミ スパイの中の白炭をかき出す棒。

カツケイシ カツキリで窯口まで出したアカメをかきよせる石。

| | | |
|------------|---|------|
| カマツリイシ | 白炭を焼く時、クチヌリに使う石。 | カガミ。 |
| クドキ | 煙道。 | カガミ。 |
| クロ | 常緑樹・杉・松・檜・櫟など。アサキに対する語。 | カガミ。 |
| コゴマ | 皮・敷木などの交っている炭。 | カガミ。 |
| コペラ | 窯壁。 | カガミ。 |
| シツカマ | 排煙口。 | カガミ。 |
| ジュニサマ | 山神様。山初めの時、しんのとおつてある木を「尺ほど」の長さに切り紙で包み、繩を十一まきまきつけ、幣束をつけオサゴ・オカシラツキ・オミキをあげてお祝いする。立木を切り残して置いて祭るとその次のお祝いの時、まだ木が生きている災がある。炭小屋でジュニサマを祭る時は、オサゴ・オカシラツキ・オミキとバンダイモチを作つて供へる。祭る日は十二日、此の日は山に入つても木だけは切らない。「一日中ナタ・カマ・ズリをおつぶり廻して、なれてのわざと言ひ余よ怪我をしないのはジュニサマが守つて下さるからだ」と語つた。 | カガミ。 |
| ジユニサマノマドギ。 | 木が岡(省略)のようになつているもの。 | カガミ。 |

| | | |
|-------|--|------|
| シラケブ | クロキに多く、切ることを忌む。 | カガミ。 |
| スバイゴヤ | 白煙。タケブーキワダケブ・イドリケブ・シラケブ・アオケブの順に出る。 | カガミ。 |
| スパイ | 白炭を消す時かける灰。最初は窯の周囲の土を使うが次第に灰が交る。 | カガミ。 |
| スミカキ | スパイをよなげる籠。 | カガミ。 |
| セメギ | 白炭を窯の上にかける小屋。 | カガミ。 |
| ソロバンギ | 加減蓋。排煙口の上に載せて、口の大きさを加減する木。九へんにしめ、九へんにあけると炭に影響がないという。 | カガミ。 |
| ソロバンギ | 最初のうち窯から出る水蒸気の多い煙。 | カガミ。 |
| テング | 糞木。青桐・桜・柳・桑等。檜・櫟以外の木。 | カガミ。 |
| テンガタ | そり道に敷く丸木。 | カガミ。 |
| テンガブ | 天井の型。 | カガミ。 |
| テンコミ | 最初のうち窯の中に立て込む事。 | カガミ。 |
| タテマタ | タテコミに使う棒。 | カガミ。 |
| テンゴヤ | 窯の上にかける小屋。 | カガミ。 |
| テンゴボリ | 床の型に地面を掘る事。 | カガミ。 |
| ナゲダテ | 木落し場。 | カガミ。 |
| ナゲダギ | ヒシテ(一日置)に炭を出す窯。ヒガマに対する語。 | カガミ。 |
| ナゲダテ | 細い炭材をオクリに立て、前方にはハリが邪魔して立ちられない太い炭材を割つて投げ込むこと。 | カガミ。 |
| ニゴヤ | そり道の傍の炭小屋。 | カガミ。 |

ニンボー　背負台を載せて休む枝。

ヌキル　イ　煙のからくないこと。
木ガエシ　立木を根本から切倒し枝をつけたままにしておくこと。

木スキ　すっかり炭火し土管のねがすいて見える時上の煙。

ハチアゲイワイ　テナゲイワイ。

ハリイシ　カガミ。

バンダイモチ　ソロバンギ。

うるちをパンの上にのせ、ヨキ(斧)のみねでつぶし、胡麻・味噌・醤油などで造ったタレをナビッて炉に立て、炭の火で焼く。ジューニサマは「餅に延び延びになつた。やつと紙を求め、原紙を書き始めたが、夏炉冬扇の言葉が思い出されてならない。

三月四日に大体の計画を立て、同二十一日一先づ調査を打切るまで随分忙しい日を送つた。昨年來の「赤城南麓の方言分布」の整理、年度末の事務、それでもどうにか予定通り二週間余りではほ諭めたが、今度は紙不足に祟られ遂に四月に入り、夜桜を見に行く賑かな声を聞く時まで延び延びになつた。やつと紙を求め、原紙を書き始めたが、夏炉冬扇の此の調査は在京の大田栄太郎氏の御教示と、本校福田克己氏の御助力による所が多い。

蕨窓を見せて貰ひ、煩はしい質問に答へて頂いたのは、次の諸氏である。

山田郡大間々町桐原　藤生 安太郎

　　川内村仁田山　高草木 鍋造

勢多郡東村小中　坂本 久吉

(四月十二日)

ヒガマ　毎日灰を出す窓。
ヒマワリ　炭化の最盛期。
フセコミ　通風口を全部塞ぐこと。
マルキダテ　原本を一把七・八貫位に束ねて窓の中に立て込むこと。

マフリケブ　黒炭を焼く時の煙。

上州薪炭材方言集稿(省略)

文献に現はれた資料三三(省略)
—伝説・小説・隨筆・和歌・俳句・謡—

八、そ の 他

異 人

○金子富次郎

この人は明治時代の人だが手先が非常に器用であった。柿の皮をむくのに一つを空へはっておいて落ちてくる中に手許の一つをむいた。又繩ないが早くて子供になつた先を持たせて走らせていながら手許でどんどんなつたという。（座間）

○中村 孝也

中村孝也は高崎の生れで士族である。その父が小学校の先生をしていて、この村へ来たので数年この村で育つた。玉木屋に孝也の使つた机が残つていたという。中村孝也の籍は玉屋の金子竜之進という医者の家にあった。有名な歴史学者になつた。（神戸）

○小池源五郎

小池の源五郎は足の速いので有名だった。近くに振舞があつて膳を借りに行くと、一晩の中に日光へ行つて借りたかどうしたかちゃんと持つて來た。

源五郎の足の速いのは高瀬盛治氏の祖父さんが大間々の市へ一緒についてゆき、途中神戸坂の曲り角迄行つたら見失つてしまつたという。源五郎は一足一間位ずつとんで行つた。一反の反物をひいて歩いて地につかぬ位早く歩いた。

下神戸の高瀬屋で土蔵の中へ鍵を忘れて戸をしめてしまった。源五郎をたのんであけてくれといつたら、人を遠ざけておいて大戸の前で手ぱたき一つしたら戸があつた。

小中のある家で普請をするお金をためた家があつた。源五郎が泥棒の先生なのでとねらうとつていいと云つて、長持の下へお金を入れ、長持の上へ乗つて寝ていた。そしたらいつの間にか長持のある下に穴を掘つて持つて行つてしまつた。

源五郎が日本中の泥棒を集めて足尾へ押し込もうとした。大黒橋で挿み打ちされて泥棒達は皆つかまつたが源五郎は渡良瀬川へとびおり死んだ風をして流れていった。つかまえる人が鉄砲で打つべえかといつたら、仲間が、死んだ者はしょがねえといったので打たれないで助かつてしまつた。

この辺の人は家を留守にする時、源五郎どんたのむと一声かけてゆくと、絶対他処から泥棒が入らなかつた。

源五郎の家には泥棒の巻物があるという噂だったが、後にさがしてみたがなかつた。一本あった巻物は善光寺の仏様であった。巻物をぬすんだ人があるらしいという話だつた。

源五郎の家は小池の弁天様のそばにあり、明治の初め迄生きていた人である。（神戸）

○法神（法神流剣道ノ梅本法神）

子供が狭い道で赤蜂の巣をついて逃げた。法神は腰をまげて上り、短刀でその蜂を皆切り落した。

子供があとで行つてみたら左の羽根ばかり落していた。（神戸にて）
(法神の説話を赤城山下各地で多い。その一つ)

余談、小中の森下久平の子森下専四郎という人、法神流のつかい手であつたという。

○金子竜之進

これは剣術使いで、新微組に入り、穴原の中沢定正等と一緒に会津戦争を行った。

神戸の新井屋の庭で日本中の剣士が集って試合をした。その時の元締をした。

神戸で追査の足山伊太郎が賊に殺された時賊がつかまつて縛られていた処へ、足山の子が来たら、竜之進が自分の鉄扇を子供に貸して、賊をたなせたことがある。（神戸）

○久保田文弼

この人は今から五十年位前エンガの改良をした。柄鉗はヘタが広くて土がはりつくるで中に穴を開けたのである。この地方では大いに用いられた。今も用いられているが、今は栃木県の鹿沼の方で作っている。

久保田文弼は一種の発明狂で、何か考える事が好きで得意であった。字を書いてそのまま複写される機械なども発明して特許願を出した。

又、ハカリ（竿秤）の棒へ水平を見る仕掛けを作り、水中の空気玉が上下するのを見て、ハカリの竿が水平になるのを知る仕掛けを考えたが、これは失敗した。

紙の上の玩具に鉄を仕込んで、下から磁石で動かすおもちゃなども作った。（神戸）

東村のスマイ（住居）

解説として—

調査に当つて全村に歩を進めることができなかつたので、沢入地区の樺沢、草木地区の下草木・横川、神土地区の神戸、小夜戸地区の松島だけに止つて、他の地区は割愛した。だから東村のスマイを称するのはいささか当らないが、一応古い家という目標を以つて、この地方のスマイの形の原流を探ることに注意を向けた。しかし所斯の調査は不敏にしてその幾分にも達することができずについたことを遺憾とする。

調査の結果の一つとして平面図を作製するに当つて、後記のような表示に従つた。また若干のものについて、構造図や断面図を作つたが、小屋組内部を精査する時間のゆとりがなく、また私事であるが視力がひどく弱いのに照明の工夫がつかなかつたので不明不詳を克服することができずじまいで不本意ながら不十分のままに終つた。

樺沢では、龜井政吉家を偶然に訪れて調査に当つた。この辺は図①で見る通り茅葺トタン葺区々で村としての傾向はつかにくかった。後に他地区を見るに付れて、家の内部のマジキリの仕方、ドマ（土間）のシキリかた、室の名称の傾向などに若干の知見が得られるにつれ、解釈ができるようになつた。現状における傾向として、マジキリの仕方は、東村を通じて四室「田」字形マドリであること、しかしその当初からの「田」字形であったかについては一考を要することに気づいた。

樺沢の後ろ山に石切場がある。鑿のカン高い音と、時間が定めてあるのか合図の声が聞え、やがてハッパの音がこだまする。あとは森闇とし

て風のそよぎがさやさやと渡る。

草木地区の上草木・下草木も同じようで、国道筋にトラックなどが過ぎた後は、その字と字の道を辿つてもほとんど人に行き会わない。遠望すると、人家も点々見えるに過ぎない。図①の下段左は渡良瀬川の対岸から眺めた下草木の景観である。それが地区内に入つて崖際の村道に入ると木の繁みのかげから、つぎつぎと家が現われる。星野富重家や高草木近吉家はそんなところにあった。樺沢では棟端の通氣孔と言つた方がいいような入母屋ふうの屋根形であったが星野家では四注（寄棟）造であり、この辺りではむしろ四注造が多いように思われる。トタンは別として、瓦葺の少いことに気つく。銅街道の昔から江戸へ直通した交通関係からか武州の四注屋根型が、ここのが深く渗透している感がする。このことと併せて、マドリが東村を通じて武州と共に「田」字形四つマニ移行したことを見せる。かつて赤城山の西南麓地帯の勢多郡芳賀村（現前橋市合併）の村誌に開運して、全村の家屋台帳（固定資産調査用）を開覧したことがある。同じく旧下川瀬村についても金村の家屋台帳を開覧した。それによると、芳賀地区では小坂子・五代・鳥取・嶺など村の北・東の地域に特にヒロマ型マドリの分布が濃密で、西・南の勝沼・小神明地区に至るに従つて「田」字形四ツマがふえてゆく傾向を知つた。下川瀬では東部の房丸・徳丸・力丸地区と、西部の鬼里・鶴光路・公田・横手・新堀・下阿内地区が、前者にヒロマ型マドリが少からず行わぬ、後者には僅少に過ぎないことを知ることができた。それでヒロマ型が赤城山麓地帯では山手に入る従つて多いこと、平坦地に下るに従つ

て少くなることを推定した。ヒロマ型と「田」字形四ツマの接触地帯を旧芳賀より下川淵村附近に一応設定してみた。先年の樺東民俗調査に際してもそれを裏書する資料を得て報告した。ところで、本村においては、現状として四ツマが圧倒的に多いことが、草木を見るに及んで、想像されるに至った。わたくしはこの現象を銅街道による住文化の流れの中に見たいと思っている。

横川は下草木の渡良瀬川対岸の、東方へ延びる谷、三境山を経て桐生市山地に通じる入口に当る。杉の美林が鋭い秀群を並べている。聚落を抜けて三叉した谷の橋までは花崗岩の細砂で坂道ながら辿りに快よい。トタンや桟瓦の屋根が点々と道の下に見える。橋を渡ると荒いバス道となつて谷を大きく迂廻すると程なく道の下に茅葺屋根が小さく見える。それが途中教えられた高草木登家であった。ここからは草木の家々は見えない。それに登家の他には家らしいのが見えない。

後に聞くとまだ一二軒の家があるという。横川はこんな所であった。

これに比べると神戸の国鉄足尾線と国道にはさまれた地城は、段丘の傾斜面になった所であるが、人家が多いし、ヤシキの占據する平らな地面が幾つかずつ続いている。高瀬英寿家・高草木幸四郎家・神山弥平家をはじめ時間に余裕があるなら見たいと思う。それらを見られたらと惜しまれるが今回は余儀なくあきらめた。図①の上段4はバスからも見えたし、中段1・2は高草木幸四郎家を訪れる往復に合計六回見て通った。附屬舎の記録を怠つたのでこの地方の土蔵の一例としたかたが、窓の下から見あげただけであった。黄色い壁と窓が最後に通った十月末の鈍目に柔かく浮いていた印象が今も残る。

榎沢以来神戸を見て「田」字形四ツマの各室が比較的に広いこと、ドマの部分が家の規模に比して古いところほど狭くなっていること、古いところは側縁が無いこと、あつても外縁で内縁に近いのがあることなどに気づいた。そして松島を見て更にその思いを深くした。現状ではエン側が内エンになっているが新旧の柱配置などから補加と見るべきだと

思われるもの、明らかに補加したものなどが見られた。横川の高草木登家では、外エンに一筋溝があったが雨戸がない。柱の木割は主柱群と太さも異なり材質・本肌の古び方がちがっていた。家人はつけ足したのではないか、初めからだと言つてはいたが、家人の知る以前に既に補加が行われてしまつたと見るべきものと解される。榎沢の角井家でも当初なかなかたろうし、後に述べる松島の松島治作家、同宝家などみな同じである。特に宝家ではエン側に面した柱には対向した仕口跡が残つて、一ケン置きに窓となつており窓下が板壁だつたことが明らかな例もあった。ザシキとその後ろ奥のマの境のシキイ・カモイの取付にも指物と見られるのがあって、三室マドリを思わせた。高草木幸四郎家などその好例である。

小中と松島は川を中に対する。松島の段丘ははつきり二段になつていて、松島治作家・同宝家は上の段、同嘉平家は下の段にある。そのあいだの急崖を越つて川の左岸を細い村道が通じていた。この途次に小夜戸の地名を思ひさせる豊郷神社の石造物もあり、みごとな室町時代の石造五重塔や宝篋印塔などがある。上り降りが多くて歩きにくいつが、対岸の花輪や小中から製糸丸山に続く山々が見とうして行楽に来られたらどんなにか楽しいだらうと思う。

小中が指呼のうちにあり、ときどき脚下の田圃や屋敷林に家がつまされている。(図①中段3・4下段右)

調べた家の周辺を略叙して解説に替える。

なお調査できた家は次の十人の方の母家である。

| | |
|----------|----------|
| 1 沢入・榎沢 | 亀井 政吉家 |
| 2 草木・下草木 | 星野 富重家 |
| 3 同 | 高草木 近吉家 |
| 4 同・横川 | 高草木 登家 |
| 5 同 | 高瀬 英寿家 |
| 6 同 | 高草木 幸四郎家 |

| | | | |
|----|--------|----|--|
| 7 | 同 | 所 | 神山 弥平家 |
| 8 | 小夜戸・松島 | 松島 | 治作家 |
| 9 | 同 | 所 | 宝家 |
| 10 | 同 | 所 | 松島 嘉平家 |
| | | | 図示に当つて、柱の当初のものと判断したものと○印（角柱であるが）、その後の修理で補加したものを○印で現わした。複元図はこれらをたよりに作製した。構造圖は断面図とともに、もと見た上で作りたかったが、構造材の組み方、接ぎ方、小屋組、ユカ下の根太をさぐれなかつたり、照明の準備ができなかつたりで、暗がりを手探りで触れてみるなど、盲ろうが大象の体を撫で廻したような程度で、記載すべき資料が極めて貧しく、図示も不十分で、恥かしいものになってしまった。 |
| | | | なお本文や表図中の寸法をメートル換算して置くことを考えたが、大変不自然な数字になるので尺寸のままにした。 |

一、マドリ

九例が四ツマである。一例は松島嘉平家でタイチガイマドリである。四ツマの九例のうち亀井・高草木(幸)・松島(治)・松島(宝)の四家はヒロマドリであったかも知れない。村でザシキと呼ぶアガリハナ寄りつきの表てがわの室にヒロマと呼ぶ家が三軒ある。(高草木近・同登・松島嘉平家) 広い室だから、そう呼称するのかも知れないが松島嘉平家では12帖半と10帖の四室のうち狭い方の10帖がヒロマになつてある。このことは表て10帖とその裏がわ12帖半の取合せが、当初表てはそのまま10帖、それに裏がわの12帖半合せて22帖半、三室マドリのヒロマであったかも知れない。それ故にヒロマの室名が称せられて今に呼称が残つてゐるのではないか。ただ村にヨモハチ・ゴトウ(四間八・五十)という家作り語が行われて八帖四室、五ケン(間)に十ケンが一応の標準形である。

が、その後の修理で補加したものを○印で現わした。複元図はこれらをたよりに作製した。構造圖は断面図とともに、もと見た上で作りたかったが、構造材の組み方、接ぎ方、小屋組、ユカ下の根太をさぐれなかつたり、照明の準備ができなかつたりで、暗がりを手探りで触れてみるなど、盲ろうが大象の体を撫で廻したような程度で、記載すべき資料が極めて貧しく、図示も不十分で、恥かしいものになってしまった。

なお本文や表図中の寸法をメートル換算して置くことを考えたが、大変不自然な数字になるので尺寸のままにした。

つたと言われるから、三室でなくて四室タイチガイマドリが行われたのかも知らない。県内のヒロマ型は、ほとんど四室タイチガイであるから。

何にしても現状は四室マドリである。

室の呼称

前田美原村(現鬼石町)調査でもそうであつたが、本村内の室の呼称には同一位置の室に呼び名だけが他室の呼称と混淆しているのが多いらしい。10例の家についても第1表のとおりである。

混淆する室名は②チャノマ五例対⑤チャノマ三例、③デエ五例対④デエ二例、②ナンド一例対④ナンド五例などである。また混り合つてはいないが注目すべきが前記した①ヒロマ三例、⑤オカツテ三例、①ナカノマ一例である。

表中○印のエンガワのない例は、ここでは一例に止まるが、村内にお例があらうと思われるし、また○印で示したエンガワが後の補加に成ったと見るべきもの、そのように推定できる例もありそうである。ナンドが②のを指す亀井家もあるから、高草木(幸)家の②チャノマの室が現在仮に二分されて二室に使われることに民家のマドリの進化が過去にも進行して來ていたことが推定される。

(表1) マドリの呼称 広さ



| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ |
|------------|--------------|-----------|----------|-----------|----------|-------|-------|-------|------|------|------|------|
| 1 亀井 | ※ | ナカノマ 10 | ナンド 5.5 | オクマ 8 | デエ (4-6) | チャノマ | アガリハナ | (ウマヤ) | ソウヤ | ダイドコ | トボグチ | — |
| 2 星野 | ※ | ザシキ 8 | 七ジヨウ 7.5 | オクザシキ 4-5 | — (7.5) | チャノマ | アガリハナ | / | / | ダイドコ | トボグチ | / |
| 3 高草木 近 | ヒロマ 10 | チャノマ 10 | — | 8 | ナンド (8) | シタノ | アガリハナ | (ウマヤ) | — | ダイドコ | トボグチ | ウラグチ |
| 4 高草木 登 | ヒロマ (座敷共) 12 | ウエノザ10 | デエ 10 | ナンド(10) | オカツテ | アガリハナ | (ウマヤ) | — | ダイドコ | トボグチ | — | ● |
| 5 高瀬 | オモテノマ 10 | ブフダン | 10 | オクリノマ 10 | ウラノマ 10 | オカツテ | アガリハナ | (ウマヤ) | — | ダイドコ | トボグチ | ウラグチ |
| 6 高草木 革 | ※ ザシキ 10 | チャノマ 10 | デエ 10 | ナンド(10) | イタノマ | アカリハナ | — | (ウマヤ) | ダイドコ | トボグチ | — | ◎ |
| 7 神山 | ※ ザシキ 12.5 | チャノマ 12.5 | デエ 10 | ナンド 10 | — | アガリハナ | — | — | ダイドコ | トボグチ | — | ● |
| 8 松島 治 | ※ ザシキ 10当 | チャノマ 7.5 | デエ 10当 | ナンド(7.5) | イタノマ | アガリハナ | (ウマヤ) | — | ダイドコ | トボグチ | / | ● |
| 9 松島 宝 | ザシキ 12 無名 | 12オクリ | 10 | デエ 10 | チャノマ | アガリハナ | (ウマヤ) | カッテ | ダイドコ | トボグチ | — | ● |
| 10 松島 嘉 | ヒロマ 10 | チャノマ 12.5 | デエ 12.5 | ナンド(10) | オカツテ | アガリハナ | (ウマヤ) | オクウマヤ | ダイドコ | トボグチ | ウラグチ | ● |

備考

※印 右ドマ左ズマイ(左回)

●印 エンガワがない

◎印 エンガワがなかったらしい

④欄 デエ相当の室で4-6は略佔相当、押入などが妻の室から入込んで、6帖の広さに当る意
なお、(7.5)当はタタミがないが7帖半に当る意

松島治作家のザシキ広さの帖当とは約10帖に相当の意



図① 村内ところどころ
上段（左から）1 横川 2 同 3 神戸
4 稲沢 5 同
中段（〃）1 神戸 2 同 3 松島
4 同
下段 左 横川から下草木遠望
右 松島から小中遠望
(撮影 矢島洋)

(表2) 全樹行に対するドマ比

| 家番号 | 全樹行 (柱マをケンに) 換算して | ドマ樹行広さ (柱マをケン) に換算して | 樹行 100対 ドマ広さ | 広狭 |
|---------------|-------------------------|----------------------------|-----------------|----|
| 1 亀井家 | 約8.5 | 約4.0 | 49強 | 普通 |
| 2 星野家 | 約7.5 | 約3.0 | 40強 | 普通 |
| 3 高草木 (近)家 | 約9.5 | 約4.5 | 47強 | 普通 |
| 4 高草木 (登)家 | 約10.5 | 約5.0 | 48弱 | 普通 |
| 5 高瀬家 | 約11.0 | 約5.0 | 45強 | 普通 |
| 6 高草木 (幸)家 | 約7.5 | 約2.5 | 33強 | 狭 |
| 7 神山家 | 約9.0 | 約4.5 | 50 | 普通 |
| 8 松島 (治)家 | 約8.5 | 約3.5 | 41強 | 普通 |
| 9 松島 (宝)家 | 約10.5 | 約5.5 | 57強 | 広 |
| 10 松島 (嘉)家 | 約10.5 | 約5.0 | 48弱 | 普通 |

備考 1. 山村として比の広狭を次のように仮定してみた

広比51以上

普通 50—40

狭 39以下

2. ダイコク柱列で樹行を区切ってドマ部分の境とした

これでみると、ドマが広いもの1例(9松島宝家)狭いもの1例(6高草木幸四郎家)で他は若干の開きはあるても普通と考えられる。一般にドマは広いのから狭いのに移ると見られるが、山村では必ずしもそうとはかりは言えない。多野郡上野村・同郡田中美原村・吾妻郡六合村での調査にも表わしていたのであつた。それはヤシキの立地条件上ドマを広げる余地がないか、菅穂形体がドマよりもコカ上部分が広いことの方が都合がいいなどによつてした。

(表2) 全柄行に対するドマ比

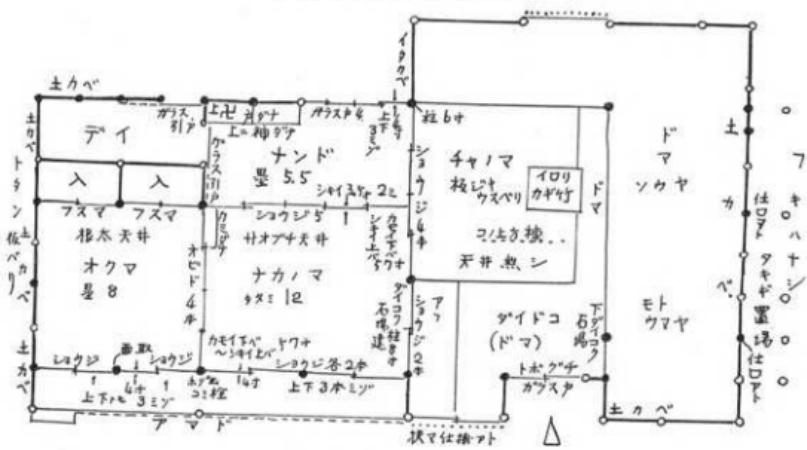
| 家番号 | 全柄行 (住マをサンニ) 換算して | ドマ柄行広さ (住マをゲノ) 換算して | 柄行 100対 | |
|----------------|-------------------------|---------------------------|---------|----|
| | | | ドマ広さ | 広狭 |
| 1 亀井家 | 約8.5 | 約4.0 | 49強 | 普通 |
| 2 里野家 | 約7.5 | 約3.0 | 40強 | 普通 |
| 3 高草木 (元)家 | 約9.5 | 約4.5 | 47強 | 普通 |
| 4 高草木 (金)家 | 約10.5 | 約5.0 | 48弱 | 普通 |
| 5 高橋家 | 約11.0 | 約5.0 | 45強 | 普通 |
| 6 高草木 (米)家 | 約7.5 | 約2.5 | 33強 | 狭 |
| 7 神山家 | 約9.0 | 約4.5 | 50 | 普通 |
| 8 松島家 (治)家 | 約8.5 | 約3.5 | 41強 | 普通 |
| 9 松島家 (宝)家 | 約10.5 | 約5.5 | 57強 | 広 |
| 10 松島家 (高)家 | 約10.5 | 約5.0 | 48弱 | 普通 |

参考 1. 山村として比の広狭を次のように便宜してみた
広比5以上
普通 50~40
狭 39以下

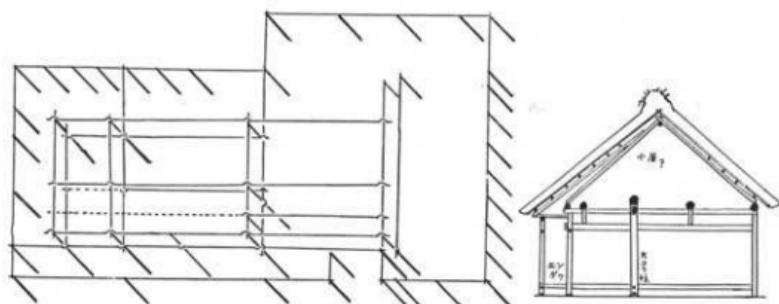
2. ドマコタ桂井で柄行を区切ってドマ部分の塊とした

（おやみのん）ドマが広いもの1例（の近畿別業）表ふるの1例（6
高草木幸四郎家）では若干の開きはあるでも普通と考えられる。一般
にドマは広いのから狭いのに移ると見られるが、山村では必ずしもそう
とばかりは言えない。多野郡上野村・同郡旧美原村・吾妻郡六合村での
調査にも表われていたのである。それはヤシキの立地条件上ドマを広
げる余地がないか、營農形体がドマよりもヨカ上部分が広いことの方が
都合がいいかななどによっていた。

図②の1 亀井政吉家

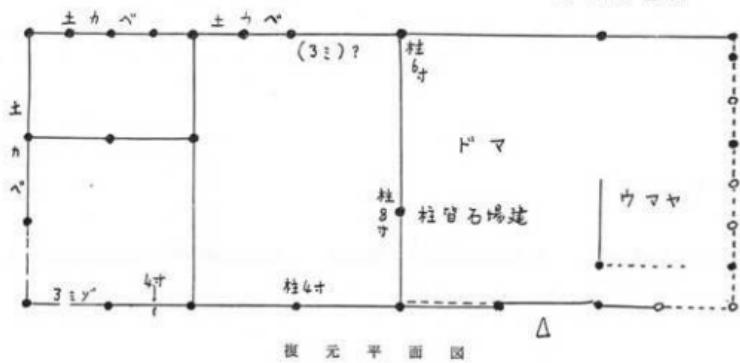


現状平面図



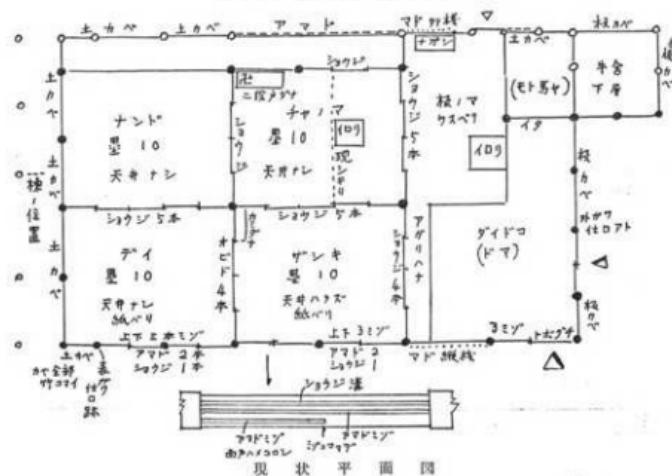
構造図

横断模型図

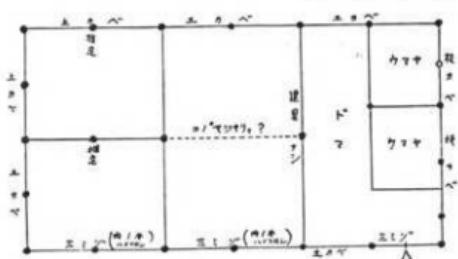


復元平面図

図②の2 高草木幸四郎家



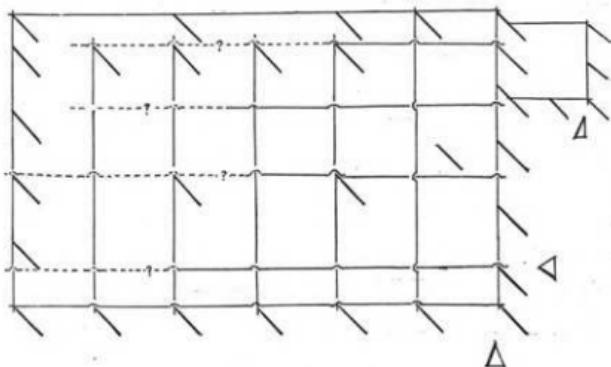
現状平面図



復元図

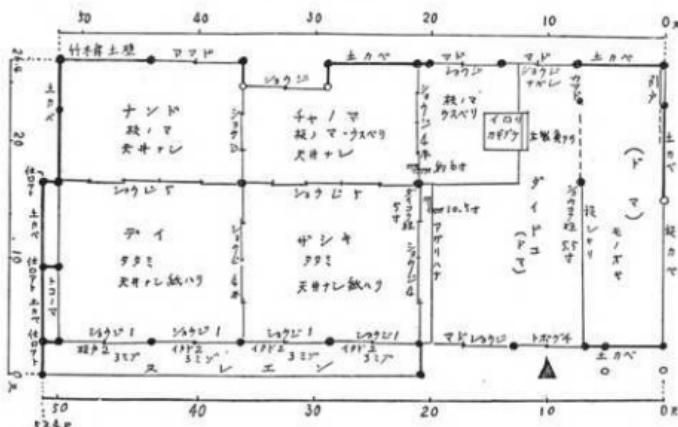


横断模型図

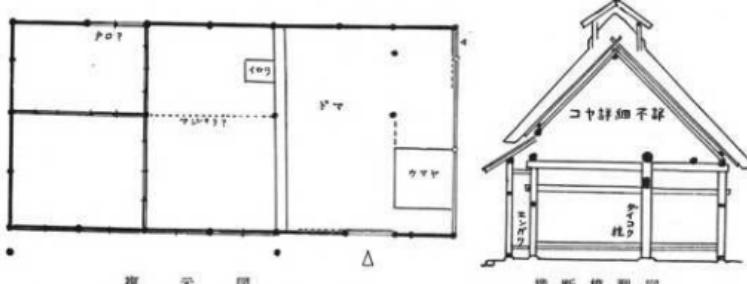


構造図

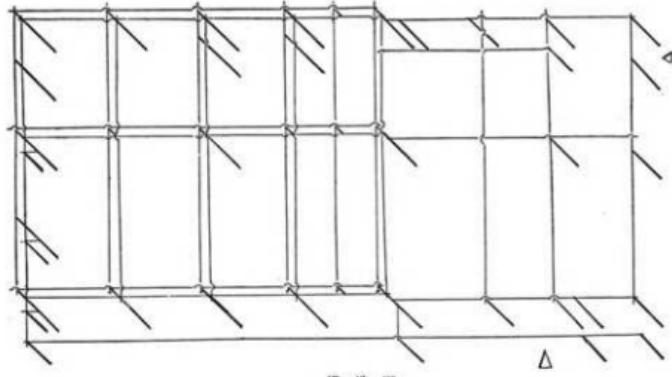
図②の3 松島治作家



現状平面図

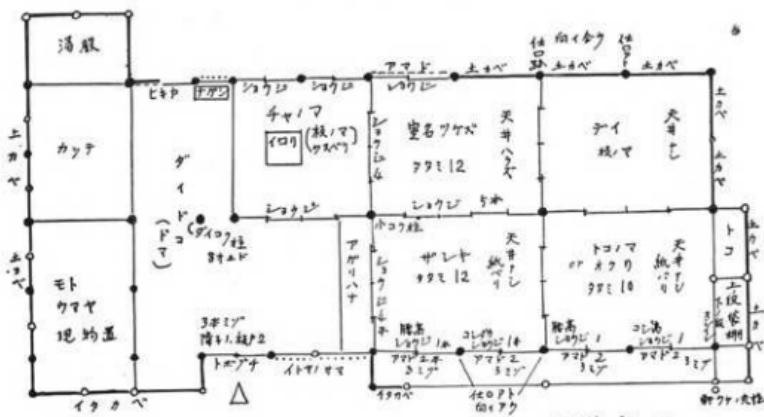


複元図

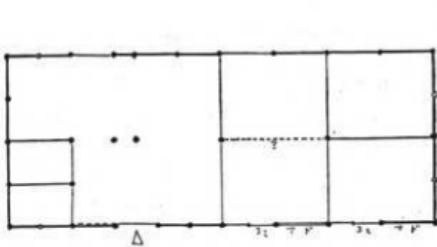


構造図

図②の4 松島 宝家



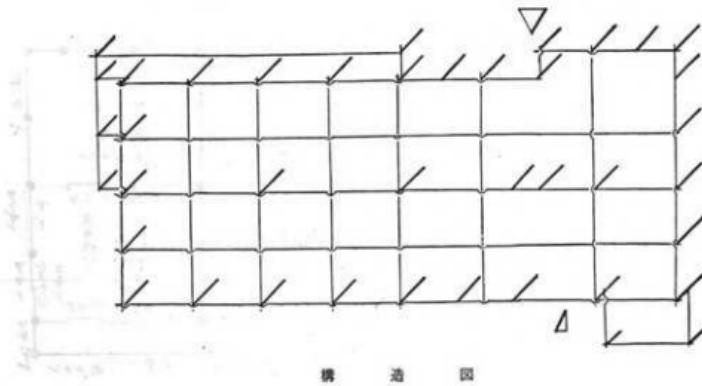
現状平面図



複元図

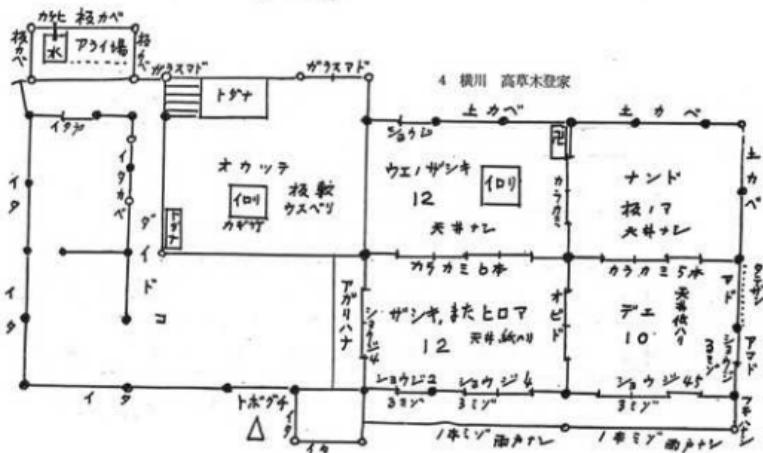
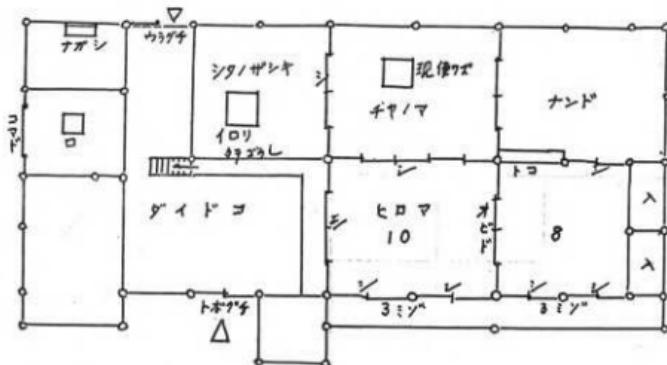
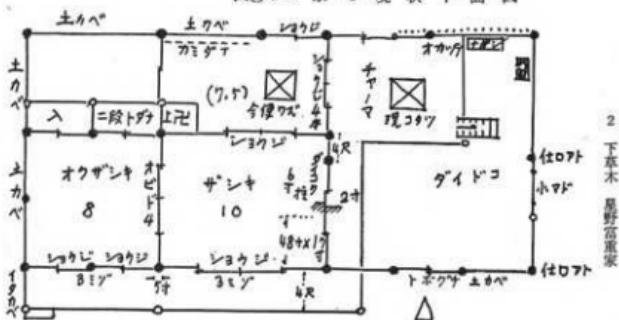


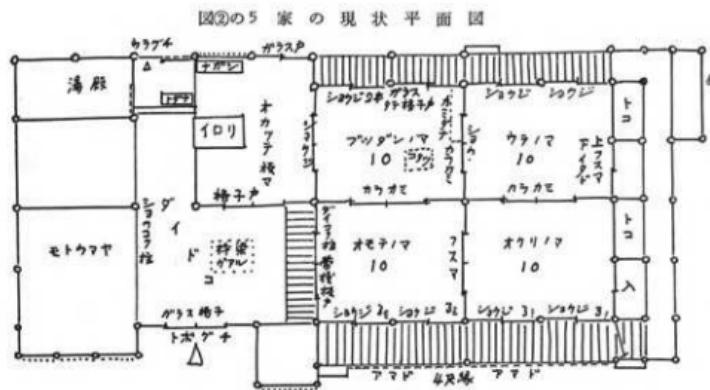
横断模型図



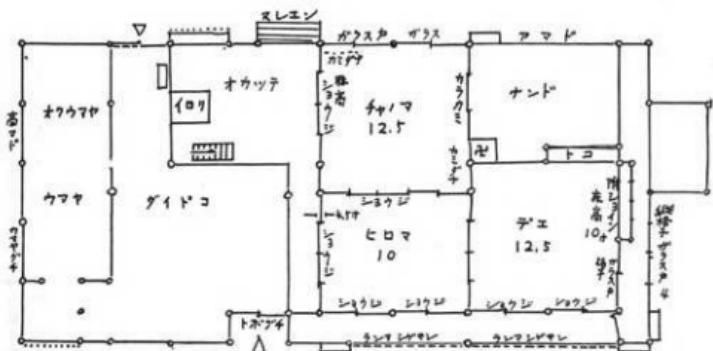
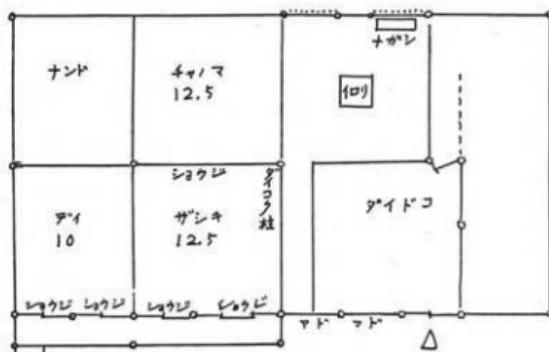
構造図

図②の5 家の現状平面図





弘化2年生まれの祖母の代に、ゴケ塗さん
がずっと住んでいた。
柱の下部にケンコボがありとく。



二、柱間装置

ザシキ（調査番号2・4・6・7・8・9）、ヒロマ（3・4・10）、ナカノ（1）、オモテノマ（5）は以下仮称ザシキと呼び、デエ（4・6・7・8・10）オクマ・オクザシキ・オクリノマ・オクリ（1・2・5・9）をデエと仮称、ナンド（3・4・6・7・8・10）、ウラノマ（5）、デエ（1・9）をナンドと呼び、ザシキの裏がわを仮りにチャノマと呼んでこの項の記述の混乱を少くしようと思う。ザシキ・チャノマとドマのダイドコの境界に障子を入れることがどの家にも行われた。特例として高瀬家では細かい組子を帯に入れた板戸を入れていた。カモイの柱への取りつきは後補でなく、当初からのものと思われる。ダイコク柱やエンガワ柱などの取り合せが自然で、後から無理に押しこんではない。ザシキとデイの境界は、どこでもオビドである。この両端は必ず柱があって、当初と見られる柱はもちろん、後に取り替えたかもわからない柱でも仕口あとや柱面を板で囲ったのは見ない。この二つの柱のあいだが壁になつた跡がない。ザシキとチャノマ境界は、紙障子をたてる。例外としてはフスマをたてた高瀬家・高草木登家の障子が多い。この境界で異色のあるのは、亀井家である。亀井家ではそのシキイ（カモイも）がドマ・ダイドコ境や、ザシキ・デエとエンガワ境のシキイと巾がちがつてある。多くの家で大たい似た巾にするのが普通なのに、この家は五分余狭くしてある。それに溝の磨滅具合が他の箇所より少く、材も新らしい。境界のダイドコ寄りには柱がなく、三尺余外れでダイコク柱になつている。奥寄りの柱の障子の明けたてで摩損した跡も少いしるので、この境界は当初からのでなく、後の改修に依つてできたものと考えられる。シキイと柱の取り合せも一応埋めたと見られシキイ上の小カベも、梁がカベの中を貫いており、シキイの上に束もなくカベの中に浮いている。

当初からの小カベとしてはおかしい。後の改修と見るべきであろう。亀井家のザシキ（ナノマ）とチャノマは初め境界のない一つの室であつたと考へられる。同じようにしてこの二室の境界が問題となるものに高草木幸四郎・高草木登・松島治作・松島室の諸家がある。

デエとナンド境界も建具で境したもの、トコノで一部境したものオシイレで全部境を作つてナンド出入りがデエからできないものなどがある。高草木近吉・松島は、奥行の浅い床を一ケンだけ設けている。ただ両家のトコノマのある位置が、右端と左端とのちがいがある。星野富重亀井政吉両家は、この境界に一ケンの押入戸棚を設け、デエのがわにフスマをたてている。両家はナンドを表してから塞き、妻側面と裏がわを土カベで塗りこめている。ただ亀井家はごく新らしく、裏がわに半ゲンだけ口を開けて、片引戸を設置したが、この開口部ははじめはなかつた。ナンドの裏がわに開口することは、松島治作家では一ケンを開いているし、松島宝家では一ケンの柱までの各柱の対向面に仕口の穴があり、これを残して土壁を着けている。これは一度開口して、後さらに塞いだのであろう。高瀬家は三方にエンガワを設けていたのでナンドの裏でわを全部建具、ナンドの妻がわにトコオシイレを設けた。松島喜平家も裏で一ケンの開口部がある。チャノマではマド・や普通の建具を入れた開口が行われている。

松島宝家ではザシキ・ナンドの表てがわを現在は建具を入れているが、対向する柱面の仕口跡から下部に板壁を入れ、その上方に窓を開いたことが知られる。（図⑤の3など）これは古形である。このような溝がついているが雨戸のないもの（表1の4、雨戸はあるが後補と見られるもの（表1の1・2・3・7・8）がある。

（表1の8）だけあるが、当初からでなく後補と思われる例、いま一筋三筋溝のカモイ・シキイ（図3・図4・図5）がわりあいに多かった。

これによって板戸（雨戸）を二本、紙障子一本を通した。板戸は夜のために用い、昼は一本を引いて開いたことがわかる。これは既に紙障子を一般庶民のスマイの座に取入れてから所産であり、カモイ・シキイが当時のものである限り、その家の年代の上限を示すものとなる。しかし他の条件も加わるから家の年代は単純にきめられない。神山弥平家は弘化二年（一八四五）生の祖母が子供の頃そのゴケばあさんが住んでいたというから、弘化二年より少くも四十五年前の人の頃に既に建ててあったということになる。寛政・享和・文化などの頃に建てられたのである。松島嘉平家では明治三十八年に屋根替かのとき梁の柄に当時より二百八十年前の年号が書いてあったと伝えている。そのまま年数を算ると一六二五年（寛永二年）になる。同家の現状からはムリな年数で、家作の年紀というよりもヤシキを定めてこの他開発に当った時とでも解すべきかと思われる。

三筋溝の中で高草木幸四郎家のは、わたくしには珍らしく思えた。こんな例に廻りあえることはほとんどない。（図2の2a）外側のが建具一本の巾でフキドメになっている。それ故にこの建具（雨戸）はハメコロシになってしまっており、特にまだ現役中である。

三筋溝が幾例も現存することは現在では珍らしい。一般庶民特に農家のスマイでは古く出入口の他はカベの部分が多く、ザシキに当る部分でもニワに向いて板戸などの戸口が少かつた。紙障子やシトミ戸が寝殿造で用いられたのは平安時代であるが、鎌倉時代に武士の居館などに、漸く紙障子が使われた。一般庶民のスマイに使用されるのは町屋を別として近世からである。シトミ戸が早く使われて上のシトミが荒い格子になり、下半分が板戸で、シトミを上に吊りあげると、下の板戸が外れるという形式であった。これは町屋で長い間行われて明治大正にも残つていた。紙障子は、江戸時代の富裕の町屋に使われて次第に農家に及んだ。だ紙は古来貴重品であったから農家が入手することは大へん困難であつた。このことは、ザシキのエンガワ境に紙障子を全部入れることを妨げ

た。三筋溝のシキイに建具を通すという工夫はこの困難を克服する庶民の哀しい願望によつて達成された。一本板戸、一本障子。一ケンのマで障子一本分が値約できる。ニワに面し開口部ができる。昼は板戸一枚織るといつが見え明るい光が射しこむ。障子を締めても半ゲンだけは明りがとれる。それでも古い障子は腰高で、紙の分がせまかった。松島宝家ではこの形がまだ生きているし、高草木幸四郎家では三筋の溝の外の一本をツキドメにして、繰り動かさなくとも差支ない戸を一つ所に固定させたのが残っている訳である。松島宝家の柱はこの部分の以前が戸口でなくてマドであったこと、そこに引障子を入れるにはエンガワ柱の中途にシキイに相当する仕口あとを残したが、ここに入れたシキイは薄い材でキャシャである。ここは揚ゲシトミを入れた跡であったかも知れない。現在行われるような障子はこれよりずっと後れて、スマイに入れた。これを促進したのは、まず外エンのエンガワがつき、その境界に雨戸溝を一本障子溝に加えたと、バタ、ツケヒバタをつけた。外エンに雨戸溝が通ることになるのはその次になる。正徳年間以来、上州は二回の養蚕盛行の機会にめぐまれた。それは長崎で白糸舟の制限によつて生糸が不足したのを補うために上州などからの「のぼせ糸」の促進と、安政年間の開港による桑糸蚕種の輸出。山村でも立桑の大木で蚕飼を盛行した。土カベの木舞はどのよ家も竹を使つていて。竹材が比較的豊富な土地で、竹などを用いなかつたという。

三、ユカ(床)天井

四、構造・架構(図④・⑤・⑥)

古い家のドザ(土座)の現在例あるいはそれがあつた話、を期待したが一例にも際会できなかつた。ただ龜井政吉家のナカノマの現天井の下方を梁間行に通る梁は、当初ドザであつたために、低位置に架けた梁でなかつたかと思わしめる。ユカ下まで調べられなかつたことが悔やまれる。板張りユカのままにしているのが表一の④の室——ナンドにだけ見られた。同國②をチヤノマと仮称すれば、このチヤノマに一二の例があつた。他のザシキ・デエでは板パリのまゝのはない。

ザシキ・デエのタタミはほとんど五尺八寸の普通のタタミであるが、星野富重家ではザシキに48寸×17寸というのがあつた。柱の真々が中京間のために工夫をされた極めて特例である。他の家は板を入れて隙間を埋めていた。表①の⑤はチヤノマというのが多いが、前項と同呼稱なので、イロリノマとでもよぶことにする。ここは例外なく板張りである。ザシキがわより二一五寸低くつくられる。ここにイロリが切つてあり、カギ竹が下り、鉄瓶がかけある。ダイドコとザシキの間にチヤノマの高さと同高にアガリハナがある。

天井はドマの上では張つてないのが多。村内は竹材が多かつたといわれるが竹スノコが少く、板を透しに張つたのが見えた。ザシキ・デエは天井を張つたのが多く、チヤノマ・ナンドは張つてないのが見えた。天井を張つてない場合は養蚕時の室温調節のために紙張りとし、天井のサラブチからカモイ止までをはりめぐらしてあり、天井裏の小屋組がのぞき上げられない。図2のなかで現状平面図中に天井なしと記入したのは紙張りを指したもの、全然ないのではなく、紙張り天井があるの謂である。

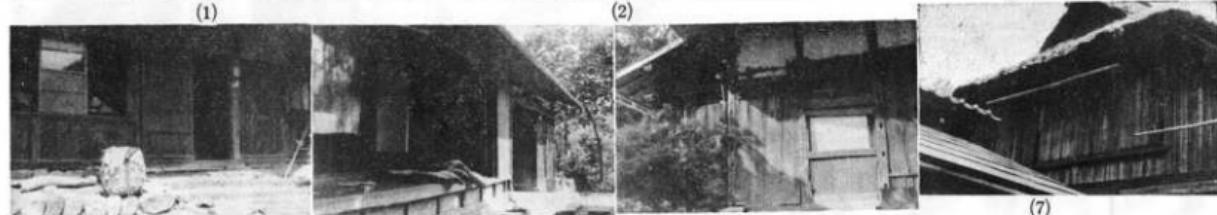
基礎、ほとんど石場建になつてゐる。國⑤の1・2・6は構造柱の露わになつたものの例。1は龜井家のダイドコ、ウマヤ境にあるショウコク柱である。この柱は下端2尺ほどで根廻した。2は高草木幸家のチヤノマ側柱である。大きい基礎の石に載つてゐる。子供の足が踏んでいるのがシキイ、基礎の左に切出し小刀の形したのが土台であるが、形も木肌の古びようも、当初からとは思われない。両側の板羽目も同様である。左端に下つてゐるのは木肌のようだが、実は乾物である。ムシロの下の石は雨落の土おさえである。6は松島宝家のダイコク柱、この家ではザシキとドマの境にある柱をダイコクとは言わないのでショウコク柱といふ。多くの場合と逆の呼稱である。ききちがいかと問い合わせられた柱も石場に建つてゐる。同國7はエンガワ柱であるが基礎石に柱下端を合わせて建てられ、土台のジコウも石面に合わせて削つてゐる。壁体はダイドコからのぞいてみてもウマヤ・ソウヤが物置になつてたり、外がわに薪がたてかけてあつたり、表面にトタンを張つたりで十分確かめ得なかつた。板壁併用で土壁がほとんど亘つた。木舞は例外なく竹。村に竹が十分ある。萩小舞などする必要がなかつたと称する。板壁部分はウマヤの側壁で三例があつた。ナンドの開口は前項に記したので省略する。今井善一郎氏から他にもナンドの開口部が多いことを教えられた。利根郡赤城根村は、本村と背中合せになつており、同村根利から、本村小中へ、日光道(日影南郷・柿平・青木・根利でこう言う)が通じていたこともあるが、その赤城根では、ナンド妻がわの開口が普通行を行つてゐた。(村誌「我が赤城根」の際の調査)今回の十軒だけではよくわからなかつたので今後注意したいと思う。



(1)

(2)

(3)



(4)

(5)

(6)

(7)



(8)

(9)

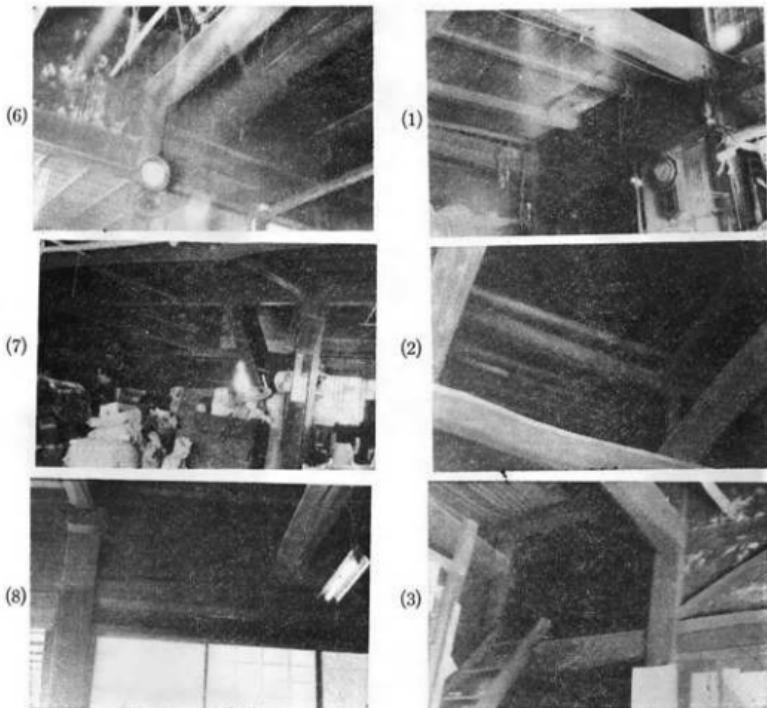
(10)

(11)

図③ トボグチ・家廻り

- (1) 高瀬英寿家一トボグチ。
(2) 松島宝家一トボグチ、右手にイトヤノサマがある。
(3) 松島治作家一トボグチとエングワ。
(4) 神山弥平家一トボグチ。サマがない。
(5) 星野富彦家一トボグチとエングワ。“右手が5の場所を先はカイド。”
(6) 星野富彦家一ドマがわの妻の下の小マド。柱に仕口跡が見える。
(7) 高草木近吉家一カブト屋根の裏二階マドと板壁。上に入母屋破風山梨県富士山麓地帯によく似ている。
(8)(9) 亀井政吉家一トボグチわきのサママド。棟の跡がマドの上下に見える。東側面の板壁と隠だ柱下から約3尺のところ。
(10) 亀井政吉家一トボグチ。柱面の黒い筋は崩れ目。
(11) 高草木幸四郎家一トボグチ3筋弄。

(撮影 矢島昇)



図④ ドマの構架

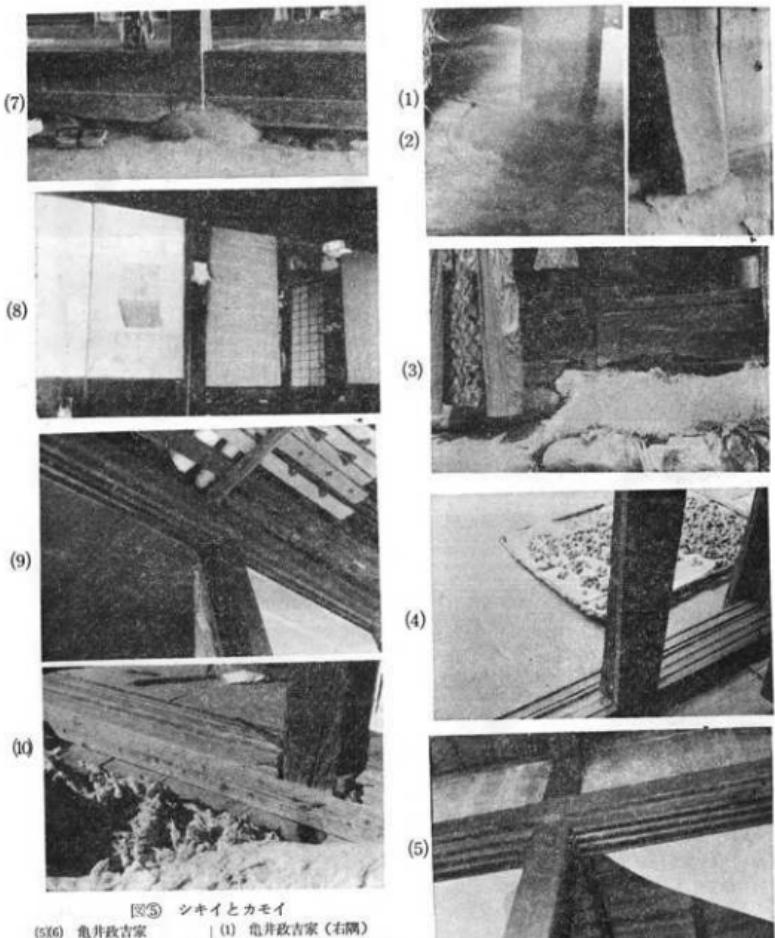
左がわ（上から）

- (6) 星野富重家のダイドコ上の構架時計のある柱がダイコク柱。
- (7) 松島喜平家のチャノマ上の構架
左奥にイロリがある。
- (8) 亀井政吉家のナカノマの構架。螢光灯の上方を通る梁に注意、土座の名残りかもしれない。

右がわ（上から）

- (1) 高瀬英寿家の正面奥へ右上方から向った数棟がドマ柱列に架かる。
- (2) 同家のドマ上に上段期の垂露をあげおろしする井桁状の構架
- (3) 星野富重家のドマ上の中二階に上るハシゴ
- (4) 亀井政吉家のドマ柱に架かる桁行の大梁
- (5) 高瀬英寿家のドマ柱列から桁行の敷梁継格子の向う奥にチヤノマがある。

（撮影 矢島 育）

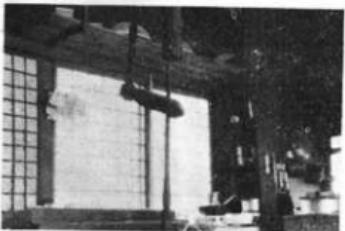


図⑤ シキイとカモイ

- (5)(6) 亀井政吉家
カモイとシキイ。カモイの上にナカノマの葉のハナが出ていている。
- (7) 松島高平家
エンガワ柱。石の面に柱頭の先が合せてある。
- (8) 松島治作家
ダイコク柱。右がわの明いた障子の向うがチャノマ。
- (9)(10) 同家のカモイとシキイ。

(撮影 矢島 肇)

- (1) 亀井政吉家(右隅)
ドマの柱、石の上に立つ。1.8尺ほどで根脚
(2) 松島宝家(左)ダイコク柱、イロリ前のダイコクに建ててある。
(3) 高草木幸四郎家
チャノマの柱石場建。このシキイの3筋溝の外が小溝はハメコロジ。
(4) 松島宝家のシキイ



図⑥ トコ（床）・イロリ

(6) 松島喜平家
トコノマ。オトリガケ
が軽く反っている。

左がわ（上から）

(7) 松島宝家
トコとタナ。
タナは二段の上段。

(8) 亀井政吉家
イロリとカギ竹、木の
魚がついている。

(9) 松島治作家
イロリのカギ竹木の魚
がついている。

右がわ（上から）

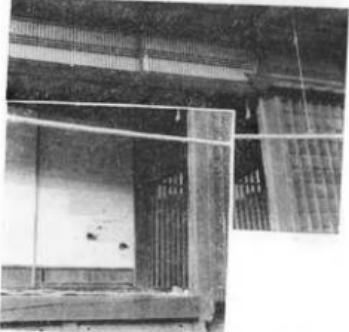
(1) 松島喜平家
附窓、ラシマに松の
透彫。左手がトコ。

(2) 高瀬英寿家
神棚 ナノマ

(3) 松島宝家
腰高障子、三筋溝のシ
キイ。柱の仕口跡でこ
こが窓であったらしい
ことが知られる。

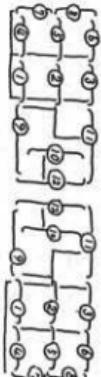
(4)(5) 松島喜平家
エンガワのラシマに美
しい繩桟ラシマ障子が
ある。
ここに戸袋の持送りの
絵様

（撮影 矢島 肝）



構造柱に注意して見たがその省略が少ないと聞いた。分った分を表(3)に

(表③) 表構造柱の省略箇所



図中の数字は柱列を指す。

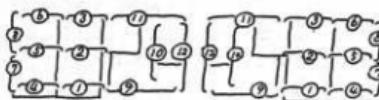
数字はケン(間)換算室巾

中1は中央柱1本、右1は右端柱など省略
+1は柱列外に加えられた柱本数

| | 亀井家 | 星野家 | 高草木 辻吉家 | 高草木 登家 | 高橋家 | 高草木幸 四郎家 | 神山家 | 松島家 治作家 | 松島宝家 | 松島幕 平家 |
|----|------------|------------|------------|-------------------|-------------|-------------|------------|------------------|------------|------------|
| 1 | — | 2ケン半 中1 | — | 3ケン 右1 | — | — | — | — | — | — |
| 2 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | ” 中2 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 |
| 3 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 4 | — | — | — | 2ケン半 ” 中1 | — | — | — | — | — | — |
| 5 | — | — | — | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | — | — | — | — | — |
| 6 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 7 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 8 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 9 | — | — | — | トガ2ケン 中1 | — | — | — | — | — | — |
| 10 | タバコ 中1 | — | — | 下ノザンキ+2 オカツテ+1 | 板ノマ+1 | — | — | チヤノマ+2 オカツテ+2 | — | — |
| 11 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 12 | — | ウマヤ 散去 | — | — | ルマヤ半分 散去 | — | — | — | — | — |

機関柱と出筋して見るがその構造が少しおかしいだ。分のけ方を表(2)と
(3)。

(表③) 表構造柱の省略箇所



図中の数字は柱列を指す。
数字はケン(間)換算室中
中1は中央柱1本、右1は右がわ柱…など省略
+1は柱列外に加えられた柱本数

| | 亀井家 | 星野家 | 高草木 近吉家 | 高草木 登家 | 高瀬家 | 高草木幸 四郎家 | 神山家 | 松島 島 作家 | 松島宝家 | 松島喜 平家 |
|----|------------|------------|------------|------------|-------------|-------------|-----|---------------|------------|------------|
| 1 | — | 2ケン半 中1 | — | 3ケン 右1 | — | — | — | — | — | — |
| 2 | 2ケン半 中1 | 〃 中1 | 2ケン半 中1 | 〃 中2 | 2ケン半 中1 | 2ケン 中1 | / | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 |
| 3 | — | — | — | — | — | — | / | — | — | — |
| 4 | — | — | — | 2ケン半 中1 | — | — | — | — | — | — |
| 5 | — | — | — | 〃 中1 | 2ケン半 中1 | — | / | 2ケン半 中1 | 2ケン半 中1 | — |
| 6 | — | — | — | — | — | — | / | — | — | — |
| 7 | — | — | — | — | — | — | / | — | — | — |
| 8 | — | — | — | — | — | — | / | — | — | — |
| 9 | — | — | — | — | トボ2ケン 中1 | — | — | — | — | — |
| 10 | ダイドコ 中下 | — | — | 下ノザンキ+2 | オカッテ+1 | 板ノマ+1 | — | — | チャノマ+2 | オカッテ+2 |
| 11 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 12 | — | ウマヤ 取去ル | — | — | — | ルマヤ半分 撤去 | — | — | — | — |

表中2・5欄は中央に構造柱を当初から建てないのかも知れないが梁の支承などに有つてもいと思われるし、特にうではナンドを閉鎖することがナンドの原初形を示すものと考えるために必要な構造柱である。そこで表中に加えて省略の有無を一応の目安にした。

亀井家ナンドの隅柱は六寸角、シヤイ巾は四寸余であるが、エンガワ面の柱は四寸三四分と少し太い。高草木幸家・松島治作家・松島喜家・松島宝家みな四寸余で、星野家では五寸を測った。どの家も四寸を超えている。ごく太くはないが普通の程度をずっと超える。これに比べると、ダイコク柱などが構造柱に比べて太くない。先年の吾妻郡六合村調査のときは、大字小雨のなかで二尺一寸余に一尺八寸余というのを測ったが、こんどでは八寸が最大で(亀井家・松島宝家など)、星野家・高草木幸家各六寸余、松島治作家五寸、構造との比率は二分一以内に止まる。側柱の柱マ(間)は全部一ケン(間)、六尺の長さより少し広いのが多かった。(毎に立つ。梁からの柱の逃げも少い。高瀬家のトボグチが二ケンで引戸としたために柱を撤去してあるが、これは後の修理によるもので、逃げが当初からではない。ドマダイドコからの見上げによると、ウマヤ柱列、ダイコク柱列に重ねた梁が見られる家もある。星野家・高瀬家がそれである。星野家のダイドコの柱列ではシヨウコク柱に当る柱を主柱として柱頭からトボグチに重ね梁が出、梁間奥へは勾配をもつて曲った梁が出て、これと列柱の繋梁が低く通っている。主柱と他の柱の上方、二重になつた梁間の梁のあいだから、ダイコク柱列に向って、主要な桁行梁が三筋、其のはかに二筋と通つて指しカモイの上に重なつた梁の上と、ダイコク柱頭、東に連つている。ダイコク柱の上方には梁間梁が通つて二重梁となる。柱面に納れる部分は柄入である。二重梁の端にサス組が載る。高瀬家のダイドコでは梁間行と桁行のそれぞれが二重梁となつていて、この重ねられた梁の井桁状の空間を巧みに利用して、並んで龍をセビで吊しあげ下げる。この井桁になった開口を見上げると梁と貫・桁・束で一種構造美がある。

亀井家のドマでは根難したシヨウコク柱の柱頭からダイコク柱へ中引が通り、その前後に各一筋が桁行に通つていて。シヨウコク列と、ダイコク列のドマ中間に梁間行の梁が通るが前記の各家でも同様である。これら格子状に走る梁と構造柱によつてドマの部分が構成される。ユカ上の方も、梁行の梁が亀井家では一ケンごとに通つていて、それがザキヤ(ナカノマ)のようになり、カモイとサラブチの中間に走つていてので奇麗を呈する。松島治作家のドマではシヨウコク柱はウマヤビタイ上の敷梁より上方に挺出して中二階(ウマヤ上二階)の小窓に接する。アガリハナからみると敷梁に根太を並べ、貫状の板を渡している。この端が母屋になり、その先端から階段状になつてサスと屋中竹をかけている。この柱列から三条の梁がダイコク柱列に架けられる。この梁とシヨウコク柱から弯曲してウマヤ柱に達する梁は壮大である。この家ではザシキがねの天井を紙張りしているので小屋組は全くわからないが、チナノマに入ると梁と柱、桁が正しく折置組になつていてのが暗がりに見える。またエンガワ柱の上方にのぞいた梁のハナが込檼で止められているのがわかる。

架構式としての折置組と込檼止めは多くの家で対面した。

図2の1-2-3-4の各b図の断面図に概要を示した。調査が十分にゆとりが見られなかつたので不明の点も多く、弯曲梁や勾配も直線にして表示した。

小屋組はサス合掌が例外なく行われること、軒廻りの表側にセガイ構造がわざわざ多いことがわかつた。松島治作家・同宝家・同嘉平家・亀井家・高瀬家などであるが、この中の治作・宝・亀井の三家は後の改修、嘉平家・高瀬家も改修の結果エンガワを作り繋の小梁の端を出したと考えられる。

幸四郎家・神山家などの竹ダルキが葺き下しで軒先に整然と並んだのは、一種偉観である。なお裏がわ軒は全部ふき下してあった。

吾妻郡六合村や群馬郡にみるセガイのように出し梁に当るもの、從つ

て二階面積増大の二階台のセガイは一例も見なかつた。

五、屋根・軒廻り（図⑦・⑧）

草葺入母屋造

亀井家（西妻だけ）、高草木近家、松島治家（西妻だけ）、松島嘉家の四例

草葺四注（寄棟）造

他の六例。

亀井家の例は破風口が小さく、四注の棟端を僅かに開口している。本村の草葺屋根の中で屋根型を大別したら、比率がおよそこの十例ほどか、入母屋が少しくないと思われる。高草木近・松島嘉・高瀬・星野・神山家などはこの種屋根で本村中代表格のものと思う。

高草木近吉家の妻を切落した小ヒラのカブト型は立派で入母屋破風はその口に木連格子を入れカブトの軒は隅樋と母屋の鼻で一つの格調を出している。また神山家は北側小ヒラを小形に切落して突きあげ小屋根をかけたが数が少く、調査した十例中には一例もなかつた。

棟に通風ヤグラをあげたのが、亀井・高草木近・高瀬・高草木幸・神山・松島嘉の六家。本村一般より少し多い比率かと思う。棟の納まりとして、棟木をあげたのが星野家・近吉家・高瀬家・嘉平家などで、その端を切出小刀のようにハナに増しをつけ、反りを打たせる形式である。棟おさえに草を植えたのが亀井・登・幸四郎の三家、大正頃まで各地で見たもの、心のふる里に残る草葺屋根である。それに葺材料に茅を用いたのがあつたことは思いがけなかつた。こんなりっぱな茅屋根の最終的なものに數えられよう。いまや材料と屋根大工の限界に来ているから。

六、ヤシキ

図⑨の1はヤシキの取扱いの一例である。

亀井家は北西に高く東と南に低い。三角形にヤシキをとつてトボグチに沿っていた。出水に浸水がたびたびあるので現位置に移したという。それは祖母が明治初め頃、養女に来た頃でやがて百年前と。養父母が早く死したので家を離いた。この移建に当つて、柱の根組やエンガワの補加が行われたらしい。移建の頃既に建築年代が何代前か、伝承が消えていた。この家は補加の部分を除いて全部チヨウナハフリである。

高草木幸四郎家は北の裏で渡良瀬川右岸段丘の中腹邊に当る。

軒廻りについては既に構造・架構の項で若干を触れた。セガイのものがその一つ。またその項で、裏がわ大ヒラの軒先が葺下しのことをかいたがそれに附加たいのは、裏手ではゲヤになつており、屋根はそのまま一と連がりに葺下すこと、妻のわでもその小ヒラ（平）を落したカブト型は別として同じに葺下す。それで軒バギーが著しく低くなる。図⑧のはよい例である。なお表で大ヒラがゲヤであるエンガワをつけたときには同國の松島治家のよう底となる。同じことがごく一部になつたのが、同國4の高草木登家のトボグチわきのサマの部である。同國2の松島宝家のエンガワ天井に当る所でもこの部分から左手前がゲヤであつて、エンガワは後に取付けたことがわかる。そして屋根は、棟から葺下ろしている。この写真の右の板は板戸で、三筋溝の外側二筋に板戸を締めたところである。その下図3は高草木幸四郎家の軒先で、ここにはエンガワがないし、エンガワを仕付けた跡もない。それでこの軒先は母屋が軒桁の上方にあり、合掌と屋中竹がその梁と桁に支えられている。

図⑦ 屋根・棟



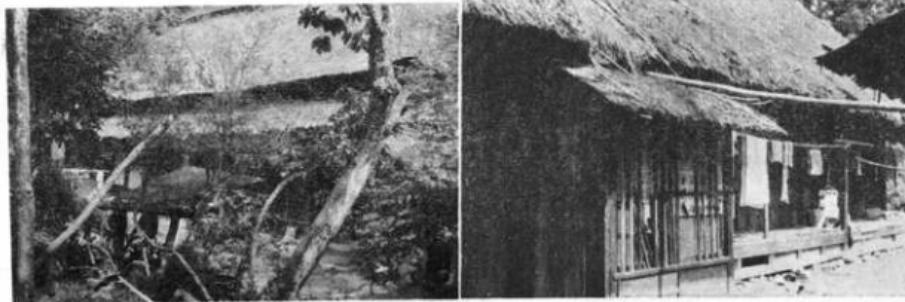
(5) 星野富重家
四柱（寄棟）造の棟端、見上げ。
(6) 高瀬英寿家
5と同型、側面の見上げ。
(7) 神山弥平家
大ヒラ（平）。
(8) 松島治作家
大ヒラのヒサシ（庇）。
(撮影 矢島 肇)

(1) 高草木近吉家
入母屋妻切落しのカブト屋根
富士山麓地帯に多い型。
(2) 高瀬英寿家
四柱（寄棟）造り妻の小ヒラ
を落したカブト型。
(3) 神山弥平家
妻に切落し突上げ屋根がある
ドマ中二階の明り窓。
(4) 亀井政吉家
入母屋ふうの妻。
棟は草でおさえてある。

図⑧ 軒 題 り



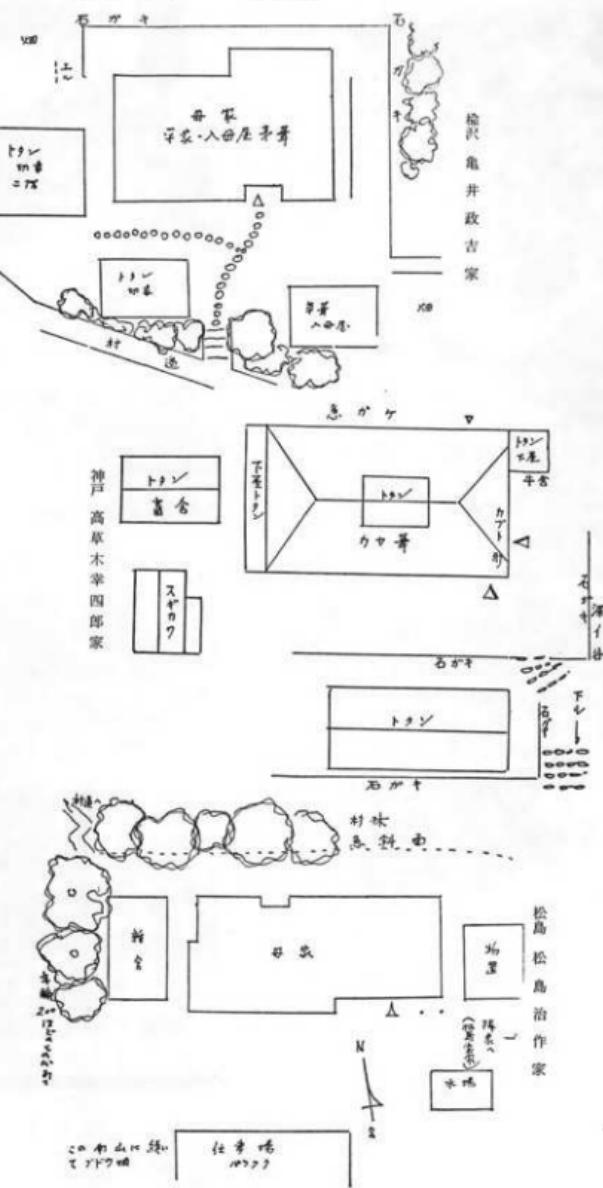
— 223 —



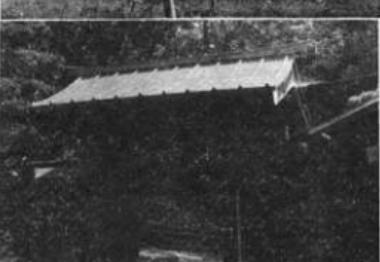
上段（左から）

- (1) 高草木幸四郎家 エンガワの軒
- (2) 松島宝家軒裏エンガワ
- (3) 高草木近吉家
カブト屋根の妻
- (4) 松島治作家の屋根ヒラ（平）全面に通るヒサシ、手前の片流れは水場
- (5) 高草木登家の軒とヒサシ
(撮影 矢島 誠)

図⑨の1 建物配置



図⑨の2 ガイドとヤシキ



- (5) 高草木幸四郎家
カイド2の神山家の先。河原石の段、左上の建物は納屋。カヤ葺屋根の下がトボグチ。
左上は納屋。
- (6) 亀井政吉家 カイド。
- (7) 松島高平家 ヤシキ
- (8) 高草木登家
カイドのわきの池。池に岩の小島がある。
(撮影 矢島 肝)

- (1) 神山幸平家
自道の東の石垣がヤシキ、カイドはその先右は国鉄
走尾線までサカオトシの坂。
- (2) 松島高平家
カイド
- (3) 松島治平家 (左) 松島宝家 (右) のヤシキ
- (4) 高瀬英平家
カイドに兼医門がある。(ニワから見る)朝日が林に
さえぎられたので門内が暗い。



図10 その他の建造物

(左) 小夜戸の石造五重塔一山瀬家の軒の一隅にある。軒は真反り、種を割出、塔身初重の黒いかげの部分に銘があるがうまく読めない。

(中) 上、下 花輪 神澤寺の門一四脚門、上の写真は正面左妻、下はその細部、木鼻のシカミ(御鳴)に注意、暗くてよく見えないが木鼻の上斜めにS字状の笠形ふうのものが柱頭が集っていることにも注意。

(右) 小夜戸一五重塔からほんの150メートルほど松島よりの方の道ばたにある。竹筒に線香の燃えがらなどがある。

(撮影 矢島 肇)

ヤシキは二段になつていて、南隣りのヤシキから廻りこんだ奥にある。このカイドへの道続きが図⑨の2の1。ニワが狭く、高低がきびしいので南隣の屋根からでないと母家だけの全景も撮影できない。カイドを見上げると城の石垣でも見るようである。ただ積石が野石だけである。松島治作は村道を覆つた暗い杉林の下草を分けて上つたら家の裏へ出た。治作氏が全景を撮るならこっちだというので広いブドウ棚をくぐつて山ぎわから宝家と仲よく並んだ屋根を見た。図⑨の2の3がそれである。

母家の正面からどうにか半分ほど撮影ができそつたのは高瀬家だけで他は三分一・四分一ほどレンズに映るだけ、斜面に建つヤシキは広くないし、ヤシキ林が茂っている。やはり本村は山村である。

七、設備、意匠など

トコノマ

浅いトコをデエのナンド壇の中央柱寄りに置いたのが萬草木近吉家、同じ室の中央柱から反対がわに置いたのが松島嘉平家である。同じ室の奥にダイドコ方向に向けて、浅いトコを設けたのが松島治作・同室二家、また同じ室及びウラノマのそれぞれにトコとオシイレを並べて二ヶ所あるのが高瀬英寿家である。

これらのうち前四家の浅ドコは、奥行が一尺五寸から一尺六七寸ときめて浅い。また近吉家・嘉平家と同じ位置を、これはオシイレで二ヶ所全体を塞いだのが亀井政吉・星野富重二家である。その後ろがわがナンドになっており、ナンドはツバがわと、裏ニワの二方を土カベで(但し亀井家は裏ニワに向って半ゲンの片引戸を後設した)で閉塞しているから、表てニワがわをオシイレで塞ぐと三方壁になる。ナンドがオベヤであり、開口は、亀井家のナンド、星野家のセジウに向つてだけであ

ることは注目される。前橋市上佐島町の福島家に類例（オシイレでなくトコ・タナで閉塞して半ゲンだけ開く）が記憶されるくらいで少い。マジキリの一つである。高瀬家の他の四家のナンド境を全部が半分を塞ぐことに、寝殿造りのヌリゴメとチャウダードー主殿造の帳台構・書院造の帳台構・庶民のスマイのジョウイとネベヤ、様式と技術を別にして、大まかな觀念の内面に一連の投影しあうものを感じる。（この点については今井善一郎氏の「利根の民俗」中の「利根民家のある特色について」を繰返し読ませて頂いた。そして高教を仰ぎたいと願っている。）松島治作家・同室家のトコは後補になると思われる。松島嘉平家はトコと矩の手に附書院を後補している。ショイン板の高さ一尺、繁枝綾子の小障子四枚を入れている。ショインランマは一枚板に松の透影としてある。これに照応して、エンガワのランマに細かい綾子の繁枝を嵌入している。

これらの各家にナゲンがあり、ナゲン・トコ・タナ（宝家）・附書院と、いはば接客用の上座敷を設けた。これがいつのことであったか、タタミをユカに敷きこむようになつてからのことと思われる。

タタミ

タタミに関連するが、本村のスマイの古建築はタタミを基準として建てているであろうか。この点に疑問があつたので一例を松島治作家の測定によつて考えてみた。（尺度はシキイ真々）

ザシキ 奥行一二・六尺 マグチ 一五・四尺
シキイ巾約四寸（四寸三分）の二寸×2を引き去るとザシキは内法

奥行一二・二尺 マグチ 一五尺
ディ奥行一二・八寸 マグチ 一五・六尺

シキイ巾一本を引くと内法
奥行一二・四尺 マグチ 一五・二尺

現場でタタミをニワ方向に縦に入れてるのでそれ従う。

ザシキ

普通タタミ（五・八尺）では
奥行に五・八尺を二かわ並びで一一・六尺

これでシキイぎわに一二・二尺との差六寸ができる。六尺タタミ（中京マの）を入れても差の二寸の隙マとなつて完尺が得られない。

マグチ行にはタタミ五列がはいる。二・九尺の普通タタミで一四・五寸で差九寸で隙マが大きい。

三尺のタタミ（中京マ）にすると三尺が五カわで一五尺となり、一ぱいになる。これだけは都合がいいが、奥行が六尺タタミ二かわで一二尺、一寸のすきまになる。普通タタミの場合と同様、過不及なしにタタミがはいらぬ。

デ イ

普通タタミで

奥行二・かわ一一・六寸でシキイ内法と八寸の差

六尺タタミで一二尺、内法と四寸差

マグチ行五・かわ

普通タタミで一四・五尺内法との差七寸

六尺タタミで一五尺内法との差二寸

デエでも一ぱいにならない。

六・三尺のタタミでも合わない。

柱マが動いていないとすると、これはどうしたことか。動かしたとすればなぜこんな不都合な柱のたてかた、従つてマジキリになったか。思ふに当初のままの柱と見るのが正しく、タタミに顧慮しない柱建てをしたのである。柱を基準としてプランを立てた。それはこの作家の頃にはまだタタミを庶民のスマイで用いていなかつた。タタミ以前の家作である。そこで柱中心に作られる柱割りで建てられた。

本村の地域、ひいて上州東部地域でタタミを民庶のスマイとして用いるのが一般化したのはいつのころであつたか。県内の資料が手に入らないので、よその地の例を拾つてみよう。享保十四年己酉三月「御条目」（京都府北桑田郡大庄屋文書）には「村里的居宅三十年以前は土間に居ね（注覆ね）ござ筵用之由」（藤田元春氏「日本民家史」、関野克博士「日

本住家小史」とい、信州大熊村藤森平右衛門家は一百年前の家ではあるが土間住居で明治三年板敷にした。ドザであるからタタミでなかつた。この家は名主を勤めたこともあり享保年間には十五町歩も手作していた大百姓家であったとい。伊藤はいと氏「民家は生きてきた」これらはドザによつてタタミ未使用の反証としたに止まるが、小倉強氏「東北の民家」によると、弘前藩寛政二年一月十一日「要記秘鑑」に「一、家作之儀切縁等は堅無用……尚又敷物之儀座敷は御国表或は七島座相用候様……」とあり御国表が豊表か座かがはつきりしないが敷物を制限している。盛岡藩の寛政十一年「御家被丙内四」には「一、近年百姓共住居等奢ニ長し障子襖簾等持等を用……前々の住居ニ立戻……疊等を不用事ニ相心得可申候」とはっきり豊禁制を打出している。仙台藩では延宝五年三月十四日「百姓共地形分御式目」に

一百姓作事之義公義御馬買衆並諸大名衆御通中ハ勝手次第……

一右之外御家中之侍衆往還之道中作事自今以後、裏板長押塗縁等不可仕之、表向板敷迄之義は不苦候事（注裏板は天井板）
一往還之外在百姓板敷堅無用之事雖然大肝煎村肝煎表向板敷之義は不苦候事

ここでは特例の外在百姓に板敷を禁止しており肝煎の名主庄屋級にだけ苦しからずと許しているが覺の事に及んでいない。文化十五年になつても禁制をゆるめていないようである。（同年「本吉郡北方品替御百姓井諸役免高等調帳」、氣仙沼町外五ヶ町村）、米沢藩は「鷹山公世紀」寛政元年六月十四日四民節陰御令条被仰下候百姓への命に曰く

一（家作は）……板敷天井板無用街道筋間屋并旅籠屋致來候分ハ格別……

一間屋旅籠屋といへとも此末新ニ備後表近江表無用……

其他

ほとんどの全面的にチョウハウフリは鬼井家・高草木近家・松島治作家など、その他のモウナ仕上げが各部に行われている。

スマイでないが花輪押澤寺門を見た。現在棧瓦葺单層の四脚門である。斗拱は大斗、構架の特色は、本柱上から、袖柱の大斗へ、笠形状のものを架け降していることである。前橋市小相木町大徳寺門とよく似

と百姓には板敷も禁じ、問屋旅籠屋、町人に豊について今までの分はそのまま、以後は無用と禁じた。安政元年になつても「天井をはり板敷の義は不相成御定」（鷹山公世紀）と禁制を緩めていない。
新庄藩は「豊は昔僅に限り厚豊へ付停止」とい、「百姓家ハ不似合手厚請不致……前々より小百姓据立士間に限り……家持よろしく相聞候間以来石場に致候儀ハ不苦候板敷ハ座敷一ト間ニ限リ……」（文化二年条々）と据立よりも石場建が丈夫だからと許したが座敷といつても板ノマだけを一室だけ許した。会津藩では、「肝煎之儀ハ……八疊敷座敷二分」（正徳元年「宋実紀」）を許したがその後「肝煎ハ……八疊敷（坪分）」（文政七年十二月被御出地下候約之覚）と改めた。この禁制は天保四年「御武面控」中で確められている。相馬藩でも天保十五年「百姓家之定」に「備後中名取の類無用」としている。名取は仙台藩名取郡で豊表を指している。

これらの各藩の禁令によつて東北六県の多くの地域では江戸時代の頃から農家スマイに板敷やタタミ使用が始められかけたようと思われるし、また使用はなくともそのきざしが見えたので禁止に至つたのかもしれない。セイタクなという今は信じられないほどのことである。

なおこれは、他國であり、また特例かも知れない。上州の場合、なお上州東部の場合でも庶民住居にタタミ使用が一般化するのは近世に入つてからであろうし、町屋を別として推定であるがそう早くはあるまい。治作家の建物が物語るところは住居史上、ほんとに貴重な資料である。

る。日光東照宮の上・中神庫の妻がわの構架にも見るが比較的少い様式である。カブキ（冠木）鼻の拳形の飾りや渦文なども注目すべきである。手入もあるが、江戸時代の中期を跨らない。

上草木武尊神社は横川の高草木重郎兵衛が明和四年建立という。（棟札）一間社流造向軒唐破風、出三斗組、極彩色、後世の精宮の中に納まり拝殿もある。重郎兵衛は高草木登家の裔祖と思われるが、登氏によると十兵衛はいたが重郎兵衛はわからぬと語られる。神戸諸水寺境内觀音堂の厨子は小形ながら、三手を出し極彩色のりっぽなもの、彩色が草木武尊神社のそれに酷似するので、重郎兵衛に関連があるか、あるいは寛政元年には座間に根岸元八という塗師がいたから、この人に関連があるか、まだ調査ができない。元八は桐生市天満宮の彩色をしている。明和八年には花輪星野万助が伊勢崎市連取町廃桶荷神社造営に関与し天保十五年には花輪星野理三郎政一が千葉県佐倉市鷺神社造営に関与している。腕利きの工匠たちが輩出している土地である。

旧小夜戸宮添八幡宮は前橋市上青葉子の馬場左近が明和五年に造営した。この宮は花輪三島神社に合併となり、社殿腐朽のため取りくずしたが、その材料は同社に保管されている。花輪辰雄氏を頼むとして大部分の材を調べた。社殿は二・四尺に二・四寸、向拝まで一・九尺ほどの平面で、一間社流造向軒唐破風、出三斗組、廻縁、脇障子、浜縁つきの小社である。千本・堅本を具え、豪殿は一・二六尺で大棟鬼板と同寸なので身寄妻のものと知られた。全極彩が残っていた。保存に努められた花輪氏、氏子の配意は高く評価されよう。

小夜戸ノ山銅真十郎氏管理の石造五重層塔がある。軒の真反りが美しく種も造出してある。各重塔身は格狭間を造出し、初重西面の格座間の中

銘文があるがまだ読めない。年紀も不詳、室町末らしい。山銅家では移

奉○供養

動したことがあるが、不吉があったとしてまもなく原位置に戻した。五重塔の西に宝慶印塔がある。塔身初重には月輪中に胎藏四仏の種子を刻み、二重には四仏の薄肉刻出がある。五重塔とともに相輪部をいためたがその他のよく残っている。

この他祥寧寺境内の五輪塔や六地蔵石幢など見た。以上は建造物などで一応見たものだけを附記した。

（矢島　胖）

附
沢入道能記

沢入道能記

題名　写本ノマ、表紙ニ「天明二年壬寅、夏四月六日、沢入道能記」ト有リ。

範囲　自天明二年四月六日至同九日。

原本　現存セズ。天保年間ニ台村劍持氏所蔵ナリ。

写本　一、静嘉堂文庫「高山仲謙紀行集」所収、劍持氏の原本ヨリ天保年間長島尉信ノ筆写ニ係ルモノニシテ最モ古キ写本ナリ。

一、「玉能御声」卷十八 解題ニハ「高山正之大人沢入道の記原紙四ツ折横本冊子のかたち前國のことく、天明二年壬寅四月六日より同九日までの記也、原紙墨付十四葉にして終る」トアル。長島氏本ヲ再写ス。

内容　郷里ヲ出テ隣郡上野国勢多郡沢入ニ遊ンダ紀行文デアル。此地ハ岩石ニ富ミ現在モ石ノ産地トシテ名高シ。

沢入道能記

(至同 天明二年四月六日)

天明二年、壬寅、四月六日、壬申、朝沐浴し、礼服し、氏神を拜し、正寝祠堂を拜礼、畢りて平吉を具し太田へ行く、先づ岡氏へ寄り、後橋本氏へ入る、宴饗あり晩に帰らんとするに拝家して止む、祖母のまわ給はんといへるを以辞すに今夜はせひといふ、今日帰り徒ふものあらは沢入の自然塔をミニといふけるに、道乗曰、其事未だ承り及ばず珍事也從ひ參らせん是るたゞせ給ひ、兼面は三峯へも御供仕らんと思ひ金ぬるに早のほり給ふと承る何卒従者たらんと存せし所なり幸がなめしつれ給はれと乞ふ、然らばとて宿す、釜屋德兵衛來り強ひ迎ふに因て夜かれか所へ到れは宴あり、正忌の故に従者成難し遣使なるとなりせめて是をとて万金丹を錢別とす、深更に至り橋本氏へ帰り寝ぬ、

七日、朝くもる、道乘が母ねふりもやらす飯したよめ飲酒のよ立ち、道乗荷を負ふ、拳掌送り出づ、文して祖母公へ沢入へ遊ふ事を申遺す、(太親方)田宿を出大鷲を過ぎ鳥山へかゝりぬ、上鳥山人家を経石橋あり二郎右衛門橋と号す、雄橋雌橋をわたり成り塚を過ぎ西ノ村へ出づ、蔽塚浅美を經岩宿を過く、これまた浅美の内なり、左山上に大なる岩あり因て名とす、人家を出松林を過ぎ堀川あり(やか)、上鳥山へかゝりむたまうと号す、岡戸氏なる代官原八ヶ村を開発し水田となさんと企てるに水もれて下に出下方の百姓頃出たるによりて自殺し遂に水田にならずとぞ、禹の聖智思ひやり侍る、兩沼新田を過ぎ大間々に至る、物調へ町より左に入、桐原村深沢市右衛門宅を尋ね芦久保茶を寄す、主素より相識なれば麦飯に酒出しあつくもてなす失せたる母か漬たる梅干也とて出す、道乗乞て出つ孝子也、深沢氏日光坂えの経路ををゆ帰には必宿せられよとい

ふ、予赤城山への志あれは約し難し待ことなけれと別れ程なく坂を上れば大道え出づ、杉のむら立所より下り右に権現の休せ給ふ所七五三を張りてみゆ、数丁にして神梅村に到る、左に覚成寺右に近須まで阿久沢氏の宅地在今は墓下に仕ひ江府に在とぞ、阿久沢の氏神は道より左の方山上により山八幡とてあり、荒宿を経深沢本宿に入らんとして右の方細道へ入島地あり桐生又次郎阿久沢能登守を攻めんとこゝに陣取といふ、四五丁にして右に大石の四角などに作りたるあり數年以前江戸阿久沢氏丈六の觀音を討取しものゝ為に千人塚の上に立んと石工に申付たるに石工価にあたら半途にして逃たりといふ、東の方に千人塚とてあり、西に南無阿彌陀仏の六字を名し裏に天正七己卯年八月廿三日戰死者幾許乃集其首埋之塚号桐生子時宝曆壬申歲六月廿日とあり、是より北に正円寺とて山上にミゆは阿久沢氏の古城址也、ほとなく中道へ出坂を下り圮橋をわたり城下といふ、神悔よりこれまで馬ひきたる賤の男と語る、このものは高奈良といふ里のもの也といふ、前路に神戸といふ所あり、田原又太郎忠綱を神に祀る、こゝに高瀬二郎左衛門といふあり忠綱か太刀を伝ふ、其先藤十郎調則といふ田原氏の臣也、小曾根筑後守か城地に住すと語る、城下を出坂を上り沼田街道に至りかの賤の男と別る、筑瀬水沼を経萩原に至る花輪と町つき也、花輪宿南北につきたる町なり暫く休み大間々より三里半といふ、塙原通にてわたせ用をわたりちかしといふ、北に来る、中野前原大目を経山中に至り橋をわたる岩うるはし虎班の石などあり、暫休山間鉄炮の音多し、神戸に到る、坂を上りて左に太郎大明神の社忠綱をまつる此所町並にて花輪より一里十丁の所也泊屋あり馬次にはあらす、酒店に休み花輪よりここなたには清みたる酒なくミニ湯酒なり、のむこと凡九盃出て大草木村を経て沢入宿へ着き問屋松島重右衛門所へ至り宿を乞ふ、十介案内にて弥三左衛門なるものに宿す、二十四五軒の町也、足尾より二里半の馬借也、日光へ八里半とぞ、花輪タ沢

入迄三里半良に来る、沼田の者やとり居たり、故を問は日光より東北一
十里奈須の内ひやりと申所にのりき有て参りぬ、ひやりと奥の白川
へ二里半斗と語る、新田邊ほかのりきへ参るもの有と道乗かたりけ
る、草木より沢入えらんとしてものしんしんたるを経るにちらく
と月の見え給ふけしきいほん方なし欄干橋によりて月をみてよめる、
相伝へそひ来て尋ね沢入の體に橋の月を見る哉

おほろにも見ゆるや嬉し光ある心の底は月そしらさん

宿の主を召して白蛇塔の事を尋ね、主がたりて云、行法力もある僧
を行ひすまして婦人をも塔へ参らしめんとまつ少女老婦の月の障なき
を具し参詣したるに難なく参りて帰る、其後又行法を修し婦人を多く
参らしめたるに天俄にかき巻り氷ぶり參詣をとけず、是よりして婦人の
参詣止みぬと語る、山間不自由なるは素ぞ覺悟のまへなり、夜具など
も出でさむからす里とかはりてさむさはありぬ、

八日、新八といふものを案内として西に進ふて白蛇塔の方へ幽谷を入、

宿の子伊右衛門も従ひ来る、暫くして源太郎なるもの追ひつきのほり
ゆく事半里斗いば沢といふ流あり、わたりて右に五間斗の大石あり、
始白蛇塔こゝにありしか飛て今の所へ行と伝ふ、又半里斗にして流あり
不動滻と号す、石に不動を彫る、北へ転し行こと一里斗にして白蛇
塔也十三重有といふ、山の中腹にあり实に深山幽谷の地なり、流れを
わたる事十余度ミナ一つ流なり石多く木立しけくよちて南へのほり塔
の半に当り北をミるに十一重也高十五丈と称す、即南の方より北に向ふ
て見たる処をこゝに因侍る。



京高十五丈と称す

後よりいたる所

此辺に白蛇住めはとて白蛇塔と号し又そう輪塔ともいひ又沢入に在は
とて沢入塔共いふとなん、此沢入塔の沢といふ、近年石工石仏を造り
塔の後山に安置して多く在塔の中段大岩の上杯にもありミニな近ころ
の作也、此塔を作にあらて天工のなす所世に珍しき事と覺ゆ、沢をこ
え、北に高十丈斗の岩山あり壁を立てる如し、是後より上り見るに
頂上に寳积迦をゑる近年の作也、此岩を不動岩と号す、頂上の体左に
図す、

不動岩頂上



白蛇塔と南北相対す塔は南也、さるをかせ多く木梢にあり源太郎なる
もの木のはりしてとりてよせたり、錢を与んとせしに逃て受す山中の
人の質朴里人の及ぶ所にあらず、十丈の岩壁上に生ひたりし木なれば
危きこといはん方なしこれにのはり勞とせず狎れたること猿猴の如
し、此北に水昌山有といふ、沢入宿より白蛇塔まで乾の方一里にして達
し、岩上に休行こと一里斗さきに休し所に帰り石にこし打かけ以後來
る人も多くは此所こしかけ岩とすへし、石数ありて休によし、不動滻
を左に見前にて流をわたり川を右にして行、大草木の内はち沢えの近
道あり、日中に及んで沢入の宿へ帰る、主に向ひ案内の者に百銅と端
錢を添酒のめよといひて道乗乗ひたり新八悦び受けたり、主草と餅菜
漬を出したるにより道乗錢を手に受けす、重ねて遊はせ給ひ我も参
らは尋ね申へし其時はとて固く辞すゆへ宿を出左に入る事一丁余わた
せの流れ川滻ありふかくして涸まく是をおたまきと号す、両方岩高く

(奇カ、イ題) て白し哥景なり、道はたゞ川に至るまで石をつたへ白き筋一すちあ
り、川をこえ向の宿をミるにかの白筋伝ひたり珍き事也、帰りて欄
干橋をわたり沢入鎮守の森を経天宮大明神と号す、右に拝しはち沢を
過ぎ是より大草木神戸に至る、(昨日休ミし酒店により酒肴をのみ大草
木の内釜石とて大成石に水を湛ひあり、又四十八海とて四十八穴の岩
有又われ石とて二ツにわれたる如きの大石あり此三石此辺に名高し、
重ねて遊び給はシミ左の川中に在と酒店の主語る、出て高瀬氏の宅
を尋ね他出ゆへ急ぎ出、暫く微雨す、花輪に至りて休み所に休ふ、
赤城山大同参詣の帰多し、今日足尾大里参詣の者にもあふ、白蛇堵え
行ものは甚た少く塔の沢が沢入宿までにあふこと廿人に過くへから
す、萩原を出わたせ川を左へわたり大間々一里斗にちかしといへ共き
のふ経たりし深沢を過く、神梅に至て暮たり、二荒坂をのほりちか道
へ入、深沢氏の宅辺に下らんとせしかと程なく又本道へ出ツ、夜の事
なれば本道をまほるかよからんと坂を下り桐原といふ所の村に入深
沢か宅を問ふ、其妻□山より帰るかと聞て今に帰らせらるゝやとて
共に門を入、主悦ひて湯に入しめ酒を出しあつくもてなしける、神梅
に至るまで勢田郡、桐原山山郡也、

九日、晴、深沢氏にて縮緼を織る機道具を見る、車に糸をくだにかけ
るも亦一つの車を廻せは多のくだへ糸まきつく仕かけなり、此業な
き

國の人見せなは嘸珍しとやいふへき、此國の綿出る事上代よりの事
にて

神功皇后の御時に魏え送らせ給ひしもの内に東錦といふものあり、日
本東方の国に出たるものゆへ此名あるにや、アツマ錦と訓し当國のも
のなるか上古の事なれは錦は今のことくにはあるまじ、二品の糸にて
織り今之の織紋已上はミナ古のにしき成へしといへは深沢氏語りけるは

上古此郡より山田部とて都え夫をのほせし事ありとぞ、ある御歌合の
御時官女を賜ふて下る後に官女綿を織りて都へ奉る是より綿織ることを
つたへ國中にひろまる、桐生の具仁田山に機織天神と号し官女をまつ
りあるとかや承る、三十年前に京都より出奔し下るもの西陣に住しよ
く織ることをしり始て紗綾織る事を伝へ夫もして工に成り錦びらう
とらしやまと織るに至るとそ語る、酒を出す、止め手振山に遊はしめ
んとす、重ねてと辞し立ち大間々天沼を経岩宿に至る是より新田郡な
り、鳥山天神の前の酒店に休ひ八ツ半斗に太田につく、先づ岡氏によ
り橋本氏の宅へ入る、酒を出し今宵は留り玉へといへと祖母公の案事
させ給はんことをして立浜田を歴新橋をわたり暮に及び細谷に帰る、
橋本氏より送りに伝語して隠宅に入る、

勢多郡東村の民俗

昭和四十一年二月二十八日印刷
昭和四十一年三月三十日發行

非売品

編集兼発行者 群馬県教育委員会

発行所 群馬県教育委員会事務局

前橋市元総社町六七

朝日印刷工業株式会社

電話(2)四三六七番

印刷所